(5) 気候

①気温、降水量

平均気温

近年の平均気温は 13.5° C 前後を推移し、全国平均気温の約 16° C からみると低いです。月別の気温変化を見ると 12 月から 2 月までの平均最低気温は 0° C を下回り、8 月の平均最高気温には 30° C を超え、年間を通して寒暖の差が大きい地域です。

最深積雪

平成 17 年の年間降水量は 2,410mm(1979 年から 2000 年の年間降水量の平年値は 2,239mm) であり、全国平均 1,800mm を大きく上回っています。年間降水量の内 45% が 12 月から 3 月までの冬期に雪も混じえて降ります。平成 17 年の最深積雪は 2 月の 61cm でした。本市は、日本海側に位置するため大陸の東岸気候の影響を強く受け、豪雪地帯となっています。近年、暖冬のため積雪が減ってきているものの、山間部では積雪が多い傾向にあります。

局地的豪雨

梅雨は、6 月から 7 月中旬まで続き、また、大気の状態が不安定となった場合は局地的豪雨となる場合もあります。

本市の気象は、冬には西高東低の気圧配置により季節風が強く、降雪の日が続く傾向にあり、県下の平野部としても積雪量が多いほうです。

②風向

フェーン現象

春先から 5 月の終わりにかけて、フェーン現象と呼ばれる乾燥した強い南風が庄川沿いでは強く、瞬間風速 30 ～ 40m/s の強風が吹き荒れることがあります。また、南砺市八乙女山から吹き下ろす南西の強風（八乙女おろし）や南東の強風（庄川嵐）などもあり、市内では庄川地域をはじめ、中野や五鹿屋地区などで強風が吹くことがあります。それらの強風が露を払うため、種籾生産に適した環境をつくっています。

種籾生産

さらに、フェーン現象では、南西から吹くこともあり、市内全体で強風となる場合もあるとともに、春先ばかりではなく、秋の台風が日本海を通過する場合にも発生しやすい傾向にあります。

春には、南南東から西北西にかけての風と北北東から北東にかけての風が多くみられます。特に南南東から西北西にかけての風が多く、砺波地方の特徴といえます。

カイニョ

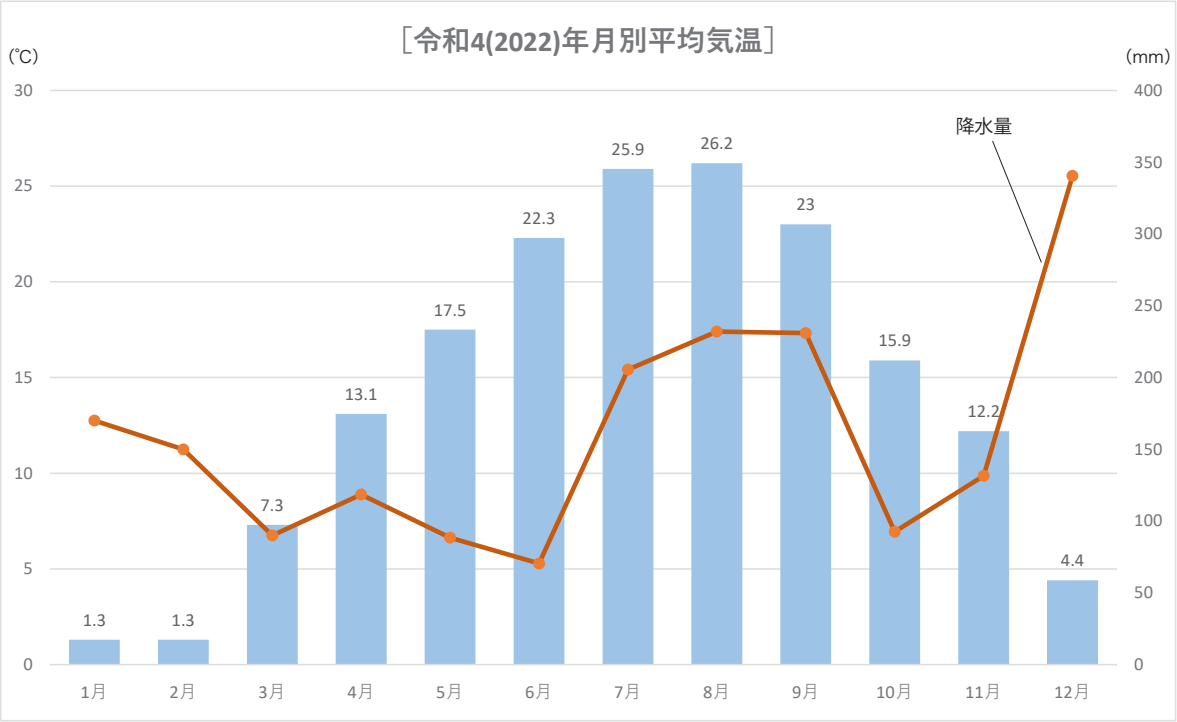
砺波平野は三方（庄東山地、高清水山地、医王山山地）を山に囲まれていて風が多く、春先にかけて強い風が吹き下ろすため平野部では屋敷にカイニョと呼ばれる屋敷林を配置しています。

夏は高温多湿で、天候は比較的安定しているものの、秋の台風時には、九州から四国を縦断する場合や紀伊半島を縦断する場合には、県内への影響も多いことから本市も警戒しなければなりません。また、発達した低気圧や寒冷前線の接近・通過に伴い、風が強まり、平均風速 20m/s の暴風が吹くこともあります。

夏になると北西の風が見られるものの、秋には南方向からの風が卓越し、冬になると、そのほとんどが南南西を中心とした風であることが読み取れ、厳しい寒風を防ぐために

屋敷林が発達してきたと言われる所以が感じられます。

風配図を見ると夏場を除けば、南から西にかけての風の出現率が高く、北西から北及び東北東から南東にかけての風は、一年を通して少なく、南から西方向の風が多く吹く地域といえます。



砺波市の月別平均気温と降水量（2022）

(6) 植生

北アルプス

富山県は、比較的小さな県ですが、平野部から標高 3,000m を超える北アルプスまで地形の変化に富んでおり様々な植生をみることができます。平野部では、原野があったころの植物はほとんど見られず、多くは新旧の帰化植物に代わっています。

帰化植物

標高 300m あたりまでの低山帯は、古くから人の手が入っていたため原植生はほとんど見られず、アカマツ、コナラの二次林やスギの植林地とな っています。標高 300 ～ 1,600m あたりの山地帯では、ブナやミズナラなどの豊かな夏緑樹が育成し、春は新緑、夏は深緑、秋は紅葉、冬は落葉と四季の彩をみせます。標高 1,600 ～ 2,400m の亜高山帯は、オオシラビソの亜高山針葉樹林が生育し、2,400m 以上の高山帯では高山草原が広 がっています。本市は、平野部から標高 1,000m に位置するため、平野部低山帯から山地帯に属しています。以下、それぞれについて整理します。

夏緑樹

①平野部

水田雑草

市街地を除いたほぼ全域が水田雑草群落に属し、原植生はほとんど 見られずヒメジョオンやセイヨウタンポポなどの帰化植物をはじめ、ドクダミやキイチゴ、ヤマブキ、ガマズミなどの人里植物も見ることができます。また、砺波平野には、スギを主とした屋敷林をもつ住宅地が点在しており、砺波平野特有の散村景観を特徴付けるものとなっています。[1]

散村景観

②低山帯

落葉広葉樹

東部の山間部は、落葉広葉樹地帯に属しており、アカマツ・コナラを中心とした雑木林とスギの植林の 2 つに大別することができます。現在、市域の自然の大半が人の手による雑木林であり､原生林はほとんど見られません。尾根筋ではアカマツ林が発達し、中腹斜面一体にはコナラ、リョウブ、ソヨゴ、ネジキ、コシアブラ、タカノツメなどの生育がみられ、雑木林の様相を見せています。また、山麓にはユキツバキ・ユキバタツバキ、アカメガシワ、クリ、カワラハンノキなどの生育がみられます。[2]

③山地帯

牛岳山頂

標高 500m 付近から牛岳山頂にかけては、ブナ - ミズナラ群落に属し、樹高 4m 程度のミズナラやシナノキ、リョウブ、草本にはトクワカソウ、ミヤマカンスゲなどが生育しています。また、谷間にはクマシデやホツツジなどのクマシデ群落が見られます。

④森林

平成 31 年 3 月策定（令和 4 年 3 月変更）の砺波市森林整備計画（砺波市森づくりプラン）では、森林は、木材資源等生産だけでなく、水源の涵養、山崩れや土砂の流出の

1　環境庁（(財) 日本野生生物研究センター)1988『第 3 回自然環境保全基礎調査生物調 査報告書 (富山県)』
2　前掲注

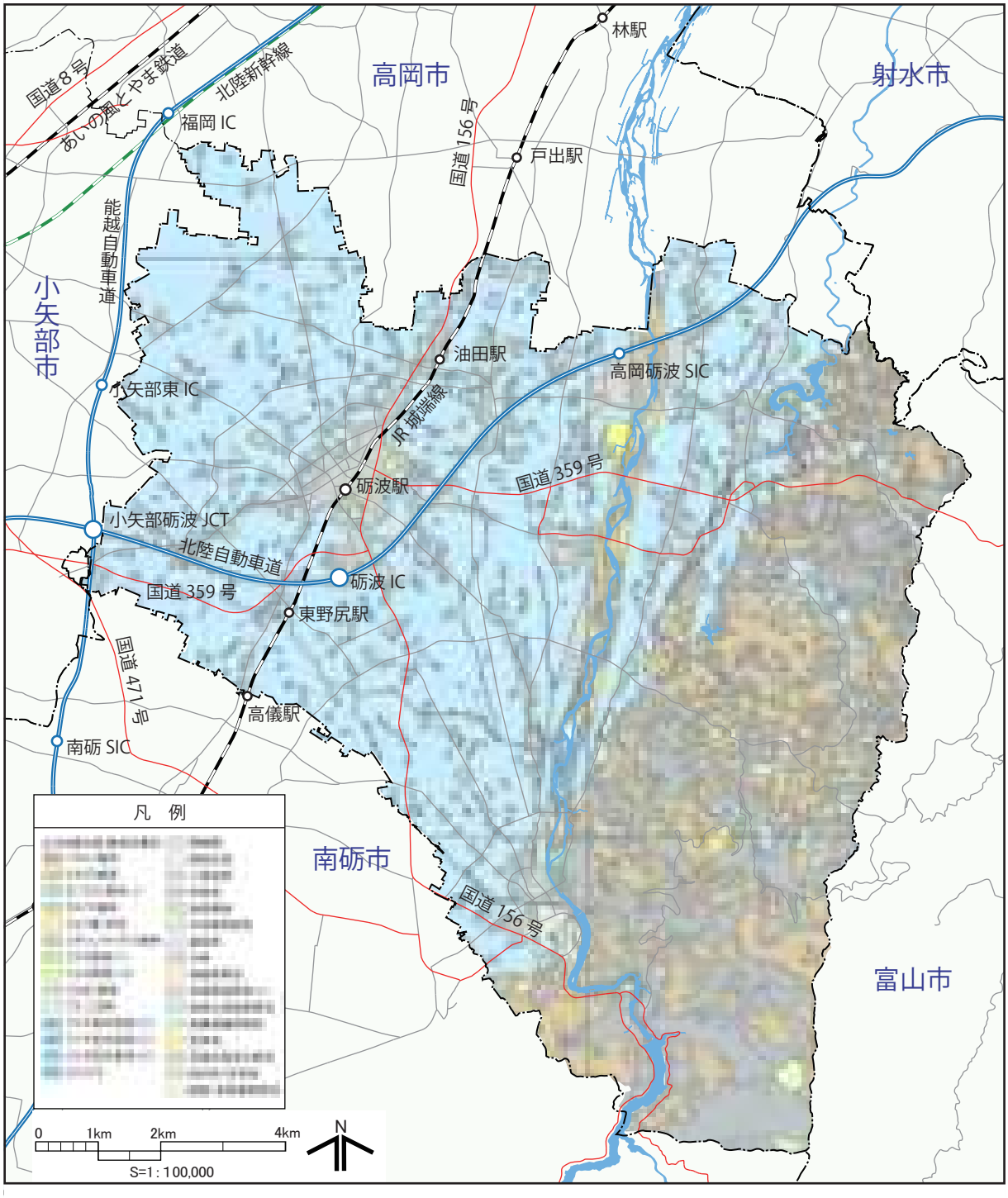
防止等、山地災害を未然に防ぐ機能を有し、地域の快適な生活環境の保全、保健・レクリエーションの機能、自然景観や歴史的風致などの文化面、生物多様性の保全及び木材等生産に重要な役割を果たしており、森林の多面的機能の維持増進を図りつつ森林施業を計画的に推進するとともに、住民参加を促進しながら整備を進めるとしています[3]。具体的には、「里山林、混交林」に区分して整備を進めるとしています。

生物多様性

里山林

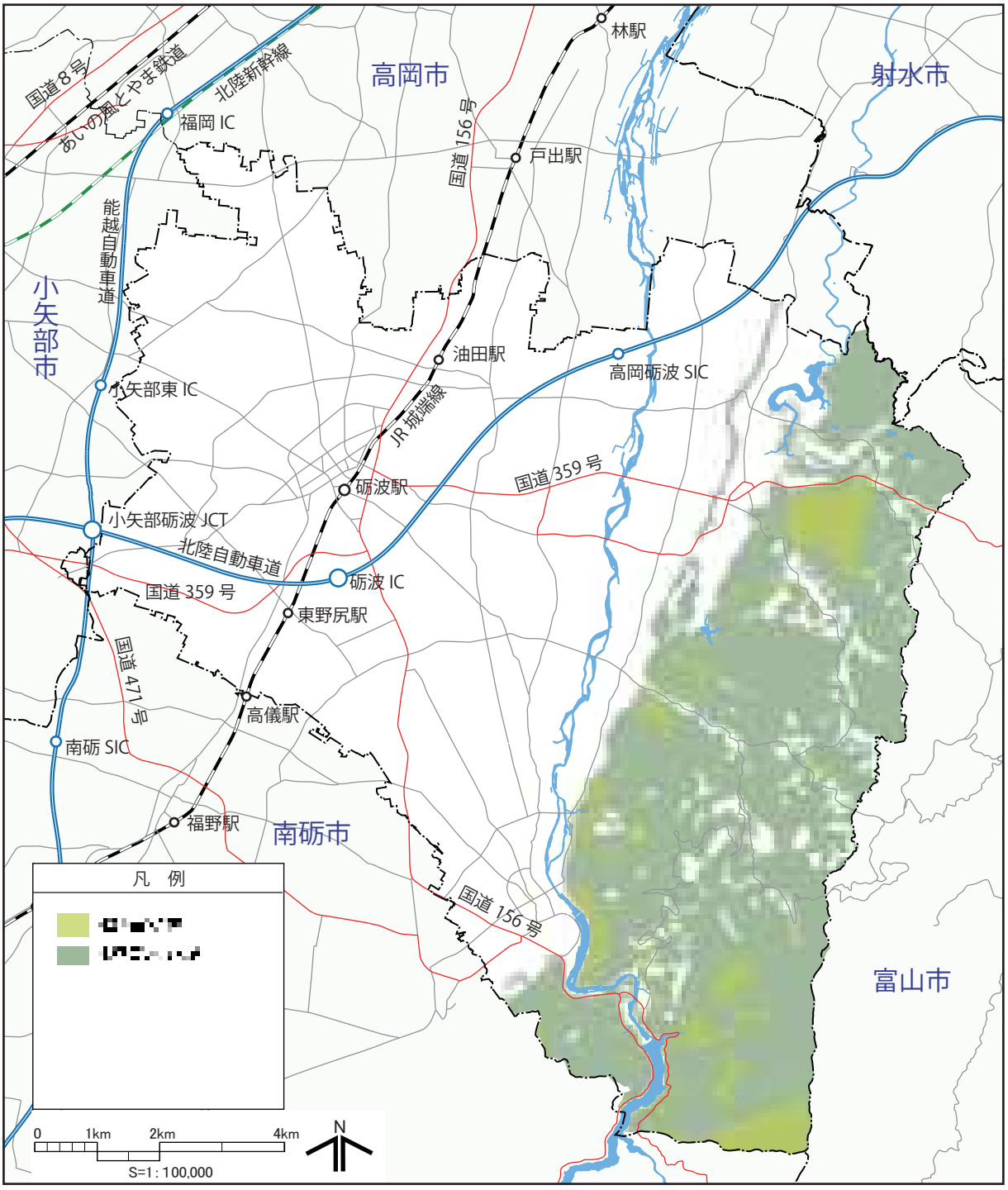
混交林

3　資料：砺波市 2019（2022 変更）『砺波市森づくりプラン《砺波市森林整備計画》』



砺波市の植生図

また、森林地域図をみると、市域の東部に保安林と森林地域が広がっていることがわかります。文化財指定されている綽如杉、伝恩光寺跡の二本杉、栃上神社の社叢といった天然記念物の分布域もこの範囲に含まれます。



砺波市の森林地域図

2　社会的状況

(1) 市域の変遷

1町20村
砺波町
庄川町

明治22年（1889）3月1日の町村制の施行により、出町ほか20村が誕生しました。その後、昭和27年（1952）4月1日に出町を中心に中野・庄下・五鹿屋・油田・林の近隣1町5村が合併し、砺波町が発足しました。また、同年6月1日に東山見・青島・雄神・種田の4村が合併し、庄川町が新設されました。

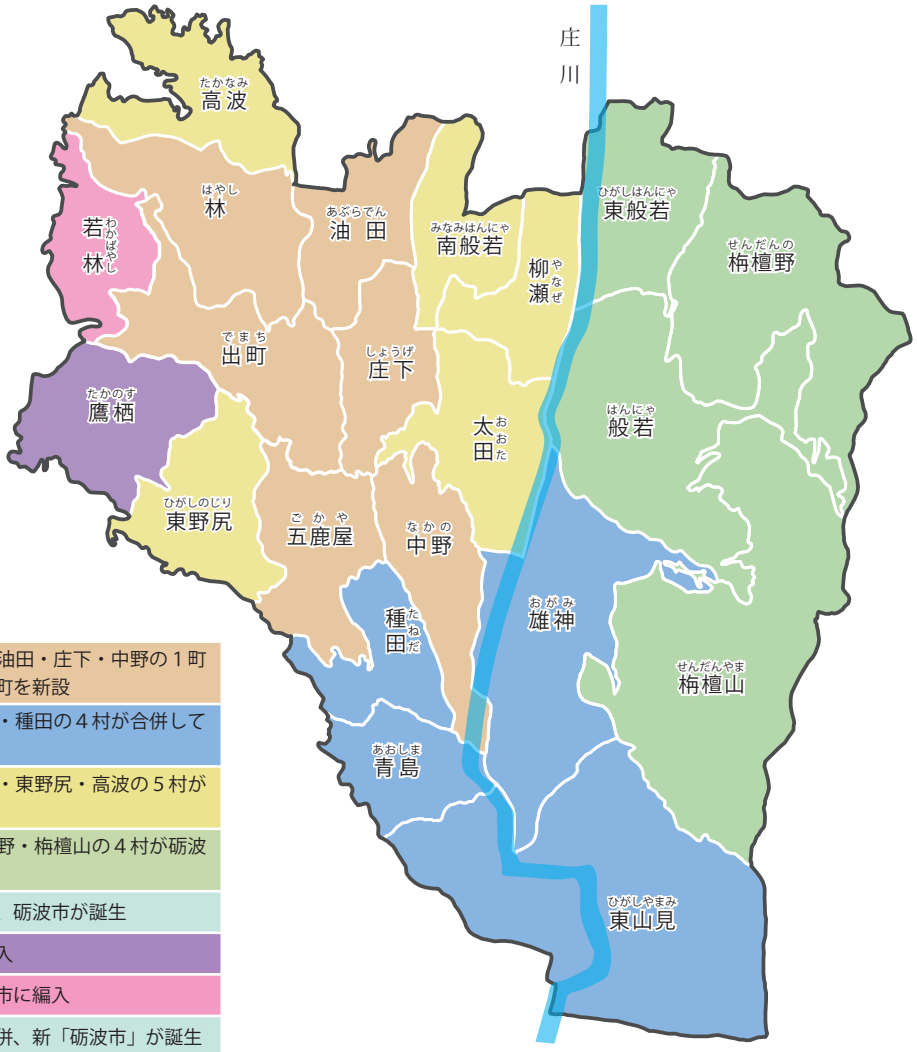
昭和28年（1953）に施行された町村合併促進法にもとづいて、昭和29年（1954）1月15日に南般若村・柳瀬村・太田村・東野尻村・高波村の5村が砺波町に編入されました。つづいて同年3月1日に東般若・般若・栴檀野・栴檀山の4村が編入され、庄川を越えて町域が拡大しました。

砺波市誕生

昭和29年（1954）4月1日に砺波町が市制をしき、県下8番目の市として砺波市が誕生しました。その後、昭和30年（1955）1月10日に鷹栖村が砺波市に編入、さらに昭和32年（1957）9月30日には若林村の一部が砺波市に編入されました。

平成の合併

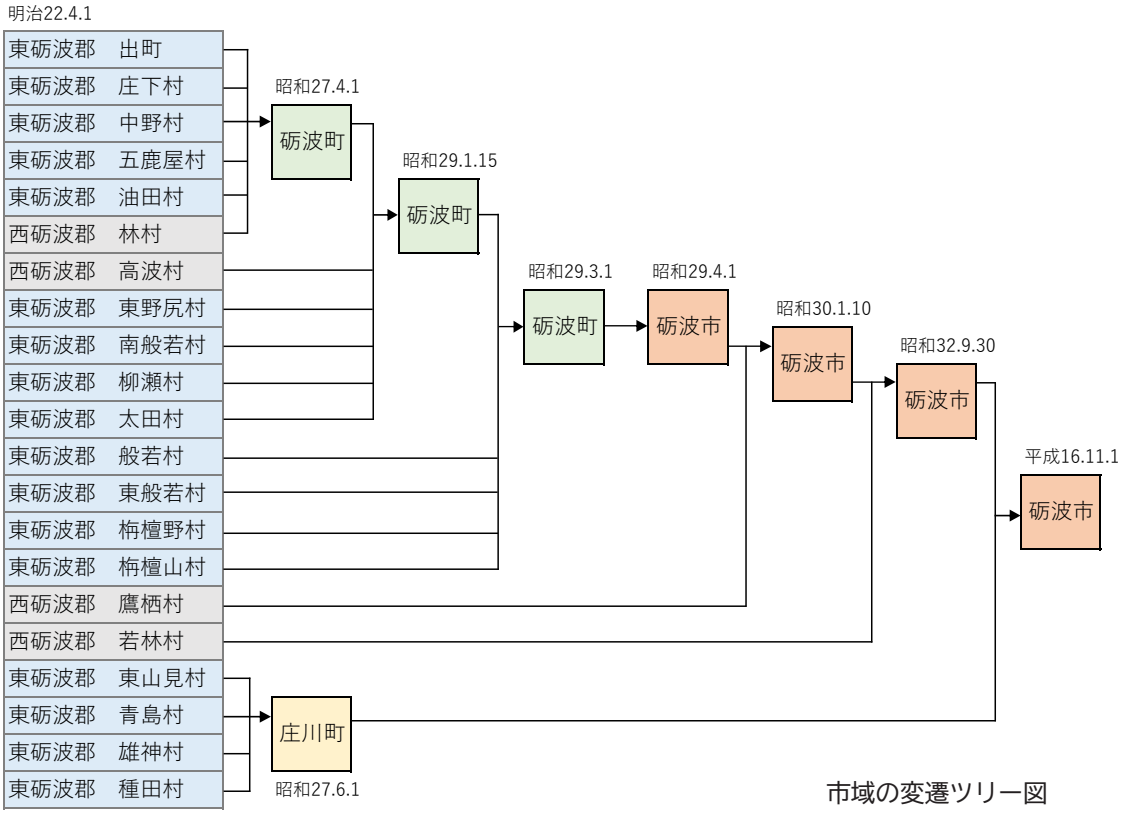
平成16年（2004）11月1日、砺波市と庄川町が合併し、現在の砺波市が誕生しました。



砺波市の市域の変遷図

砺波市　町村合併のあゆみ

S27.4（1952）	出町と林・五鹿屋・油田・庄下・中野の1町5村が合併して砺波町を新設
S27.6（1952）	東山見・青島・雄神・種田の4村が合併して庄川町を新設
S29.1（1954）	南般若・柳瀬・太田・東野尻・高波の5村が砺波町に編入
S29.3（1954）	般若・東般若・栴檀野・栴檀山の4村が砺波町に編入
S29.4（1954）	砺波町が市制をしき、砺波市が誕生
S30.1（1955）	鷹栖村が砺波市に編入
S32.9（1957）	若林村の一部が砺波市に編入
H16.11（2004）	砺波市と庄川町が合併、新「砺波市」が誕生



市域の変遷ツリー図

市域の変遷年表

年月日	合併市町村等	人口（人）	世帯数（世帯）	面積（㎢）
明治 22 年 4 月 1 日	東砺波郡　出町　誕生	※ 4,497	927	6.01
〃	東砺波郡　庄下村　誕生	※ 1,563	271	3.62
〃	東砺波郡　中野村　誕生	※ 1,721	310	7.48
〃	東砺波郡　五鹿屋村　誕生	※ 2,059	350	4.43
〃	東砺波郡　東野尻村　誕生	※ 1,973	358	4.52
〃	西砺波郡　鷹栖村　誕生	※ 2,349	389	5.17
〃	西砺波郡　若林村　誕生	※ 2,942	478	7.59
〃	西砺波郡　林村　誕生	※ 2,504	442	5.74
〃	西砺波郡　高波村　誕生	※ 1,667	315	4.92
〃	東砺波郡　油田村　誕生	※ 1,664	296	3.95
〃	東砺波郡　南般若村　誕生	※ 1,545	263	3.48
〃	東砺波郡　柳瀬村　誕生	※ 1,490	255	3.52
〃	東砺波郡　太田村　誕生	※ 1,921	328	5.06
〃	東砺波郡　般若村　誕生	※ 2,409	493	10.24
〃	東砺波郡　東般若村　誕生	※ 2,175	342	5.06
〃	東砺波郡　栴檀野村　誕生	※ 2,252	415	9.44
〃	東砺波郡　栴檀山村　誕生	※ 1,984	342	14.31
〃	東砺波郡　東山見村　誕生	※ 2,908	554	15.30
〃	東砺波郡　青島村　誕生	※ 1,408	269	2.28
〃	東砺波郡　雄神村　誕生	※ 1,411	289	10.12
〃	東砺波郡　種田村　誕生	※ 1,390	249	6.00
昭和 27 年 4 月 1 日	砺波町　誕生 （出町、油田村、庄下村、中野村、五鹿屋村、林村合併）	16,882	3,124	28.79
昭和 27 年 6 月 1 日	庄川町　誕生 （東山見村、青島村、雄神村、種田村合併）	8,282	1,556	30.77
昭和 29 年 1 月 15 日	南般若村、太田村、柳瀬村、東野尻村、高波村編入	25,810		50.24
昭和 29 年 3 月 1 日	般若村、東般若村、栴檀野村、栴檀山村編入	34,475		87.68
昭和 29 年 4 月 1 日	砺波市　誕生	34,475	6,992	87.68
昭和 30 年 1 月 10 日	鷹栖村編入	36,908	6,741	92.85
昭和 32 年 9 月 30 日	若林村（狐島、下中村の一部、西中村の一部）編入	37,904	7,114	※※※ 96.33
平成 16 年 11 月 1 日	新砺波市誕生　　旧砺波市、庄川町合併	※※ 49,171	14,217	126.96

※ 明治 22 年の町村の人口，世帯数は明治 31 年富山県統計による。面積は昭和 25 年富山県市町村勢要覧による
※※ 平成 16 年 9 月 30 日での数値
※※※ 昭和 32 年 9 月 30 日時点の砺波市の面積は 96.33㎢であるが、平成 10 年から 96.31㎢となっている。

(2) 人口

人口ピーク

本市の人口は、令和２（2020）年国勢調査において 48,154 人となっており、人口のピークであった平成 17（2005）年以降、やや減少傾向で推移しています。国立社会保障・人口問題研究所（社人研）による将来推計によると、2040 年の人口は 43,266 人、2060 年の人口は 34,992 人と予測されている中、長期的に人口減少を抑えることで、2040 年の人口を

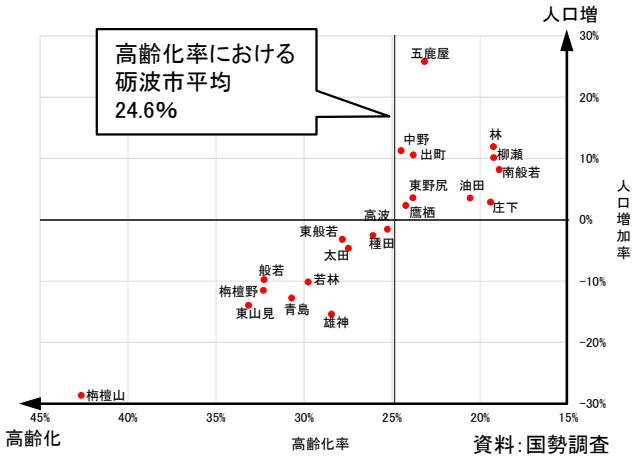
目標４万人

44,203 人、2060 年の人口を約４万人とすることを本市はめざしています。令和６年 11 月現在の人口は、●●●●人です。

認定申請の直前の人口を記入

地区別人口の状況からは、人口増加率が高い地区は高齢化率が低く、人口増加率が低い地区は高齢化率が高い傾向がみられます。地区別人口では、出町、五鹿屋、林、柳瀬地区などで人口が増加する一方、庄東地域、庄川地域などでは人口減少が顕著にみられます。年齢３区分別人口割合では、当面は老年人口が増加する一方で、年少人口及び生産年齢人口の割合は年々減少していくことが予測されるため、文化財の担い手等の不足が懸念されます。

■各地区の人口増加率(H12-22)と高齢化率(H22)の関係

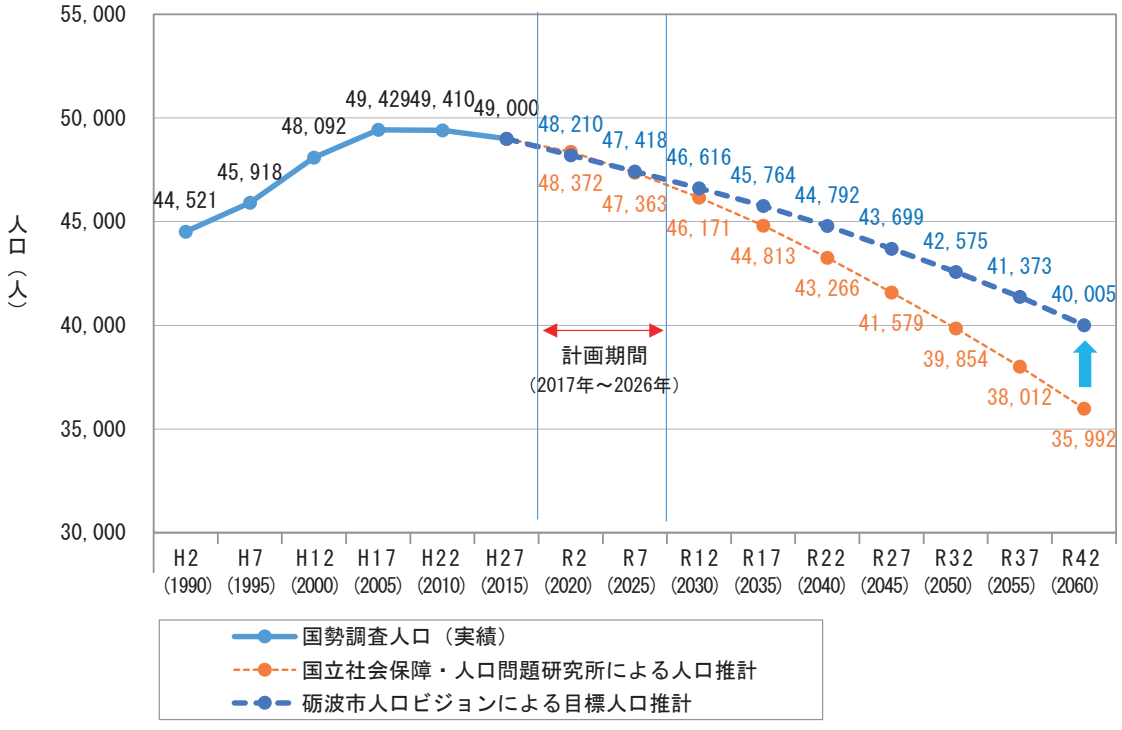


資料：国勢調査

■地区別人口の比較

地区名	H17	H27	増減	地区名	H17	H27	増減
出 町	8,035	8,491	5.7%	柳 瀬	1,994	2,187	9.7%
庄 下	2,463	2,449	△0.6%	太 田	1,721	1,594	△ 7.4%
中 野	1,794	1,746	△ 2.7%	般 若	2,213	1,955	△ 11.7%
五鹿屋	1,996	2,196	10.0%	東般若	1,454	1,408	△ 3.2%
東野尻	1,911	1,992	4.2%	栴檀野	1,502	1,270	△ 15.4%
鷹 栖	3,107	2,979	△ 4.1%	栴檀山	603	462	△ 23.4%
若 林	888	793	△ 10.7%	東山見	2,553	2,147	△ 15.9%
林	3,898	4,334	11.2%	青 島	2,354	2,091	△ 11.2%
高 波	1,639	1,522	△ 7.1%	雄 神	1,009	892	△ 11.6%
油 田	4,735	4,708	△0.6%	種 田	1,230	1,158	△ 5.9%
南般若	2,767	2,884	4.2%	計	49,866	49,258	△ 1.2%

※外国人人口を含む　資料：住民基本台帳(各年４月末)



人口の推移及び人口推計・目標人口推計（砺波市 2022『第２次砺波市総合計画後期計画』より）

(3) 産業

就業者数をみると、「製造業」「卸売業・小売業」「医療・福祉」が高くなっています。また、特化係数[1]をみると、「農業」「鉱業・採石業・砂利採取業」「製造業」「電気・ガス・熱供給・水道業」「複合サービス事業」等が高くなっています。これらの結果を踏まえ、本市では、就業者数が多く、特化係数が高い「製造業」が基盤産業です。

基盤産業

①製造業と商業（卸小売業）

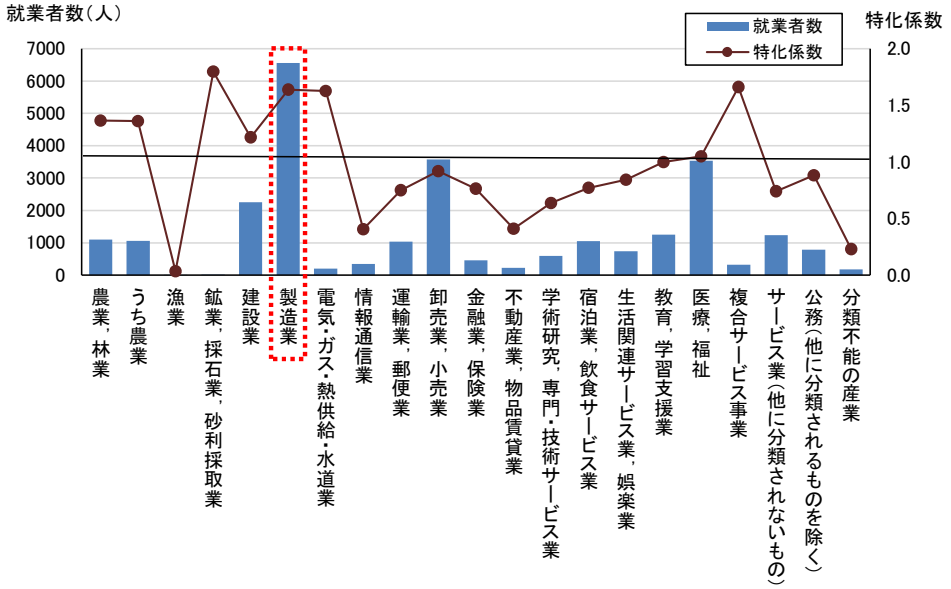
2016 年経済センサスにおける稼ぐ力（修正特化係数[2]）と雇用力（雇用割合）をみると、稼ぐ力のある上位５産業は、「電子部品・デバイス・電子回路製造業」「協働組合（他に分類されないもの）」「農業」「非鉄金属製造業」「家具・装備品製造業」です。

雇用吸収力の高い上位５産業は、「飲食店」「その他の小売業」「飲食料品小売業」「社会保険・

1　特化係数：本市の就業者全体に占める産業別の構成比を、全国の産業別構成比で除した数値です。特化係数が「1.0」を超える産業は全国平均と比較して就業者数が多いことになり、特化係数が高い産業ほど相対的な集積が高く、本市の特色を占める産業であるといえます。

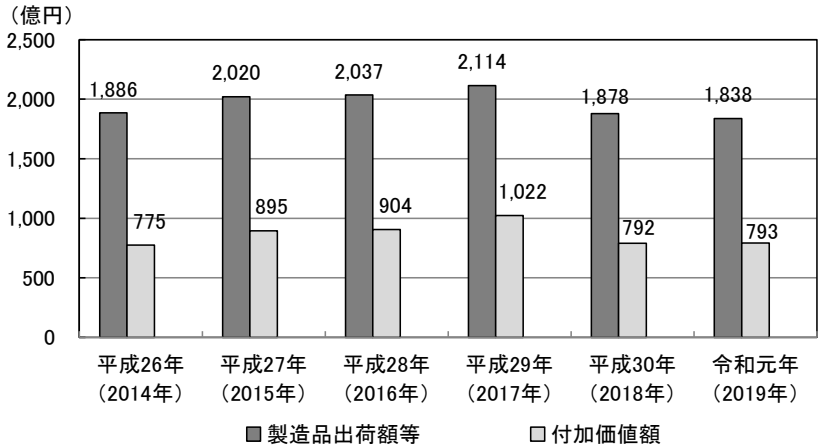
2　修正特化係数：そのまちで特化された産業を示す特化係数に輸出入（自足率）による補正を行い、当該産業の世界における強みを表したもの

■砺波市における就業者数と特化係数



資料：国勢調査（令和２年度）

■製造品出荷額及び付加価値額の推移



資料：工業統計（各年 12 月 31 日現在）

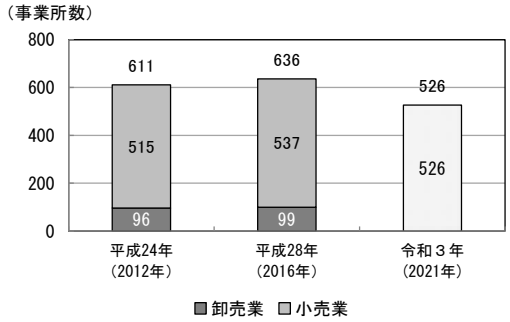
※　付加価値額：企業の生産活動 によって新たに生み出された価値のこと

■産業中分類別製造品出荷額等、付加価値額、現金給与総額の状況

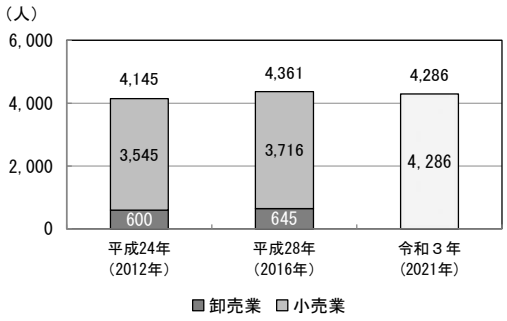
産業中分類	製造品出荷額等（万円）	粗付加価値額（万円）	現金給与総額（万円）
食料品製造業	891,628	376,128	127,801
飲料・たばこ・飼料製造業	2,970,484	667,250	121,694
繊維工業	528,306	232,981	114,909
木材・木製品製造業（家具を除く）	105,157	44,048	22,550
家具・装備品製造業	547,001	184,697	98,763
パルプ・紙・紙加工品製造業	X	X	X
印刷・同関連業	345,865	150,072	37,730
化学工業	X	X	X
石油製品・石炭製品製造業	X	X	X
プラスチック製品製造業（別掲を除く）	524,440	244,258	96,991
窯業・土石製品製造業	517,113	225,700	95,435
鉄鋼業	X	X	X
非鉄金属製造業	3,117,675	623,388	197,008
金属製品製造業	1,183,742	450,475	215,411
生産用機械器具製造業	477,021	254,959	115,452
電子部品・デバイス・電子回路製造業	6,422,541	4,153,434	740,471
電気機械器具製造業	X	X	X
輸送用機械器具製造業	310,285	142,451	111,407

資料：工業統計（令和元年（2019 年））　※Ｘは秘匿値

■卸小売業における事業所数の推移



■卸小売業における従業者数の推移



資料：総務省・経済産業省「経済センサス－活動調査」
※　令和３年は速報値（卸売業・小売業の合計値のみ）

社会福祉・介護事業」「総合工事業」となっています。特に「電子部品・デバイス・電子回路製造業」で稼ぐ力、雇用力ともに高くなっています。

卸小売業における事業所数と従業者数の推移をみると、いずれも平成 28 年から減少に転じています。（砺波市 2023『第３次砺波市商工業振興計画』）

②農業

水田農業

本市の農業においては、豊富な水と早くから整備された農業基盤を有効に活用し、水稲を中心とした水田農業が営まれており、水田面積は、４，７６０ha（令和４年度）とほぼ横ばいで推移しています。

集落営農

農家数は、1,082 戸（令和２年農林業センサス）で前回 1,566 戸（平成 27 年農林業センサス）から 484 戸減少しており、集落営農の組織化や担い手への農地集積が進んだこと等により農家数は減少しています。

さらに、農業者の高齢化が進んでおり、農業就業人口に占める高齢者（65 歳以上）の割合は 85.6％と高まってきており、担い手不足が顕在化しています。

農地集積率

また、担い手への農地集積率は着実に伸びており、令和５年４月における集積率は 76％を

超えているが、受け手の少ない地域やほ場条件の悪い地域では集積が進まず耕作放棄地の増加が懸念されています。

耕作放棄地

農業産出額は、米に大きく依存した構造となっていることから、近年は、米以外の地域振興作物（チューリップ球根、たまねぎ等）との複合経営へ転換を図られた農家も見られるようになっています。

複合経営

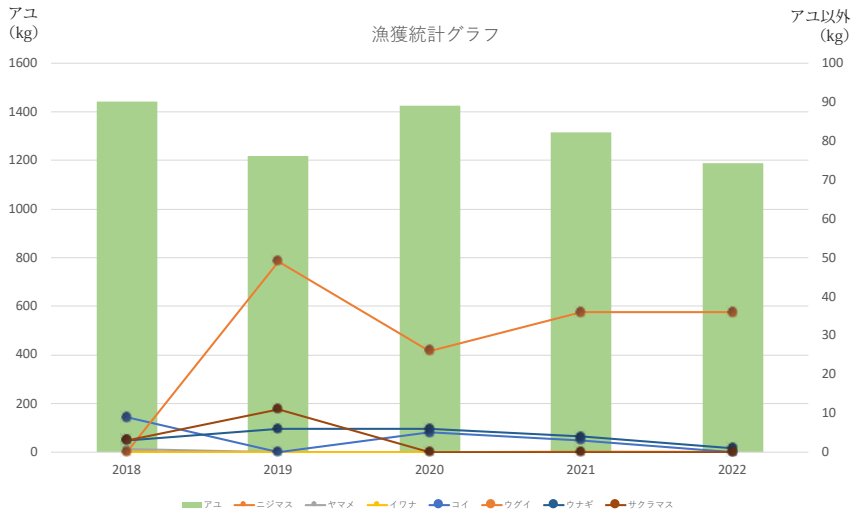
しかし、農家所得に占める農業所得の割合（農業依存度）は年々減少し、農外所得に依存した農家経済となっています。

③漁業

本市の漁獲量の大部分はアユによって占められ、その量は全体の 95％以上にのぼります。庄川のアユ漁は毎年 6 月から 11 月末までが解禁で、その他の期間は禁漁となっています。アユの他の魚種ではニジマス、ヤマメ、コイ、ウグイ、ウナギ、サクラマスなどがあります。

庄川の鮎

年	アユ	ニジマス	ヤマメ	イワナ	コイ	ウグイ	ウナギ	サクラマス
2018	1442.5	2	13	0	9	0	3	3
2019	1220.3	0	0	0	0	49	6	11
2020	1423.3	0	0	0	5	26	6	0
2021	1314.3	2	0	0	3	36	4	0
2022	1190.1	0.5	0	0	0	36	1	0



漁獲量一覧と漁獲量統計グラフ

（砺波市漁業協同組合漁獲高より作成）

④林業

本市の面積 12,703ha のうち森林面積は 3,470ha で市域の 27％を占め、そのほとんどが民有林です。森林資源を表す材積は 998 千㎥、 1 ha 当りの材積は 228㎥となっています。森林整備や林業コストの低減に必要とされる林道及び作業道は、176 路線、約 180km 整備されており、 1 ha 当たりの路網密度は約 52 mとなります。

民有林

近年では、従来からの補助事業による取り組みを進めながら、「県民参加の水と緑の森づくり事業」を積極的に活用し、森林整備や基盤の整備等の支援を図ってきました。

森林整備

本市は、森林面積が 5ha 未満の小規模所有者が多数を占めていることから、計画的で効率的な森林施業の実施が困難な状況にあり、施業の集約化を重点的に進めています。また、既存の市民団体の森林整備活動についても積極的に推進し、支援をしています。

人工林

森林・林業をめぐる状況ですが、再生産が可能で二酸化炭素の吸収・固定につながる人工林の多くが間伐等の手入れの必要な林齢から木材として利用可能な林齢となっています。しかしながら、林業収益性の低下を反映して、造林や素材生産活動が低迷を続けていること、山村地域の過疎化や林業就業者の減少と高齢化、地形等の制約による林業機械の導入の遅れや生産基盤の整備・木材等の流通・加工体制が脆弱であるため、取り巻く環境は厳しくなっています。

林業収益性

流通・加工

（『砺波市森づくりプラン《砺波市森林整備計画》』）

⑤観光

本市には、県下有数の一級河川の庄川が流れる砺波平野に位置し、東南部には三条山から鉢伏山、牛岳など標高約 300 ～ 1,000m の山々が連なり、豊かな自然に育まれ、人々の生活に結びついた観光資源が存在しています。庄川がつくる扇状地には、扇頂部に灌漑用水の源があり、扇央部には肥沃な農地に「カイニョ」とよばれる屋敷林が点在する典型的な散村（散居村）が広がり、古くから稲作が行われてきました。良質種もみの県外向け受託生産量が日本一となっています。稲作を育んだ散村景観は国内でも有数の規模を有し、鉢伏山にある散居村展望台は撮影スポットとして人気を集めています。

散居村展望台

チューリップ

球根栽培

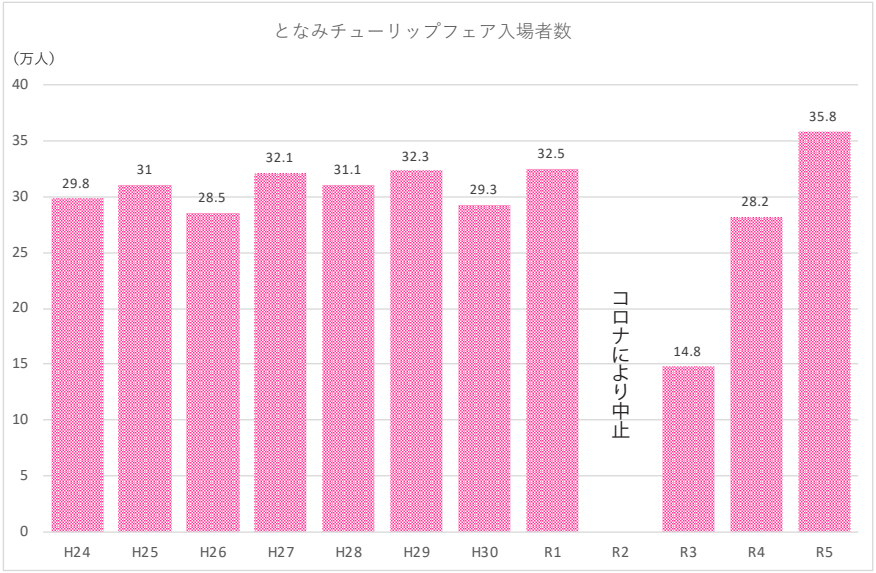
扇央部では、稲作とともにチューリップの球根栽培が盛んで、日本一の出荷量を誇ります。また、県を代表するイベントである「となみチューリップフェア」をはじめ、頼成の森花しょうぶ祭り、となみ夢の平コスモスウォッチング、チューリップ公園 KIRAKIRA ミッションといった多種多彩なイベントが行われています。伝統的な行事としては、出町子供歌舞伎曳山、庄川観光祭、となみ夜高まつり、厄払い鯉の放流などがあります。

子供歌舞伎

大門素麺

特産品はチューリップの球根や切花をはじめ、種もみ、大門素麺、庄川挽物木地、庄川ゆず、三郎丸蒸留所ウイスキー、金屋石、庄川鮎などがあります。また、庄川峡や庄川温泉郷の豊かな自然や文化に育まれてきた地域資源にも恵まれています。

庄川温泉郷



となみチューリップフェア入場者数のグラフ

(5) 土地利用

平野部はＪＲ城端線沿線の出町地区や油田地区、旧庄川町の中心部である東山見地区や青島地区に市街地を形成し、その周辺に広がる田園地域に集落が分布しています。庄川右岸地域には、森林が多く分布しています。

JR城端線

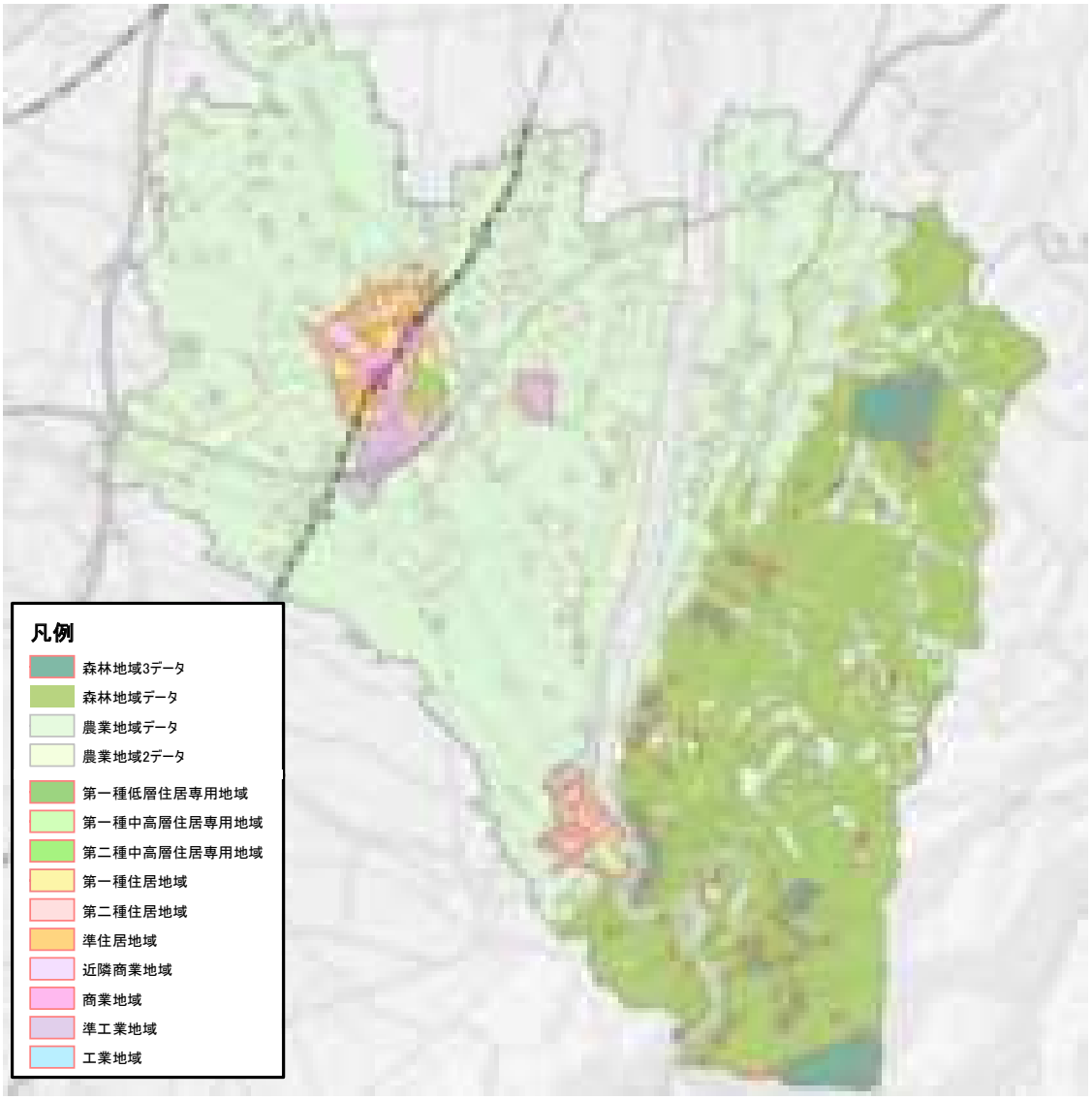
都市計画区域内は、出町地区及び東山見地区、青島地区に用途地域が指定されています。出町地区は主に商業地域や準工業地域に指定されており、東山見地区及び青島地区は主に住居地区に指定されています。

都市計画区域

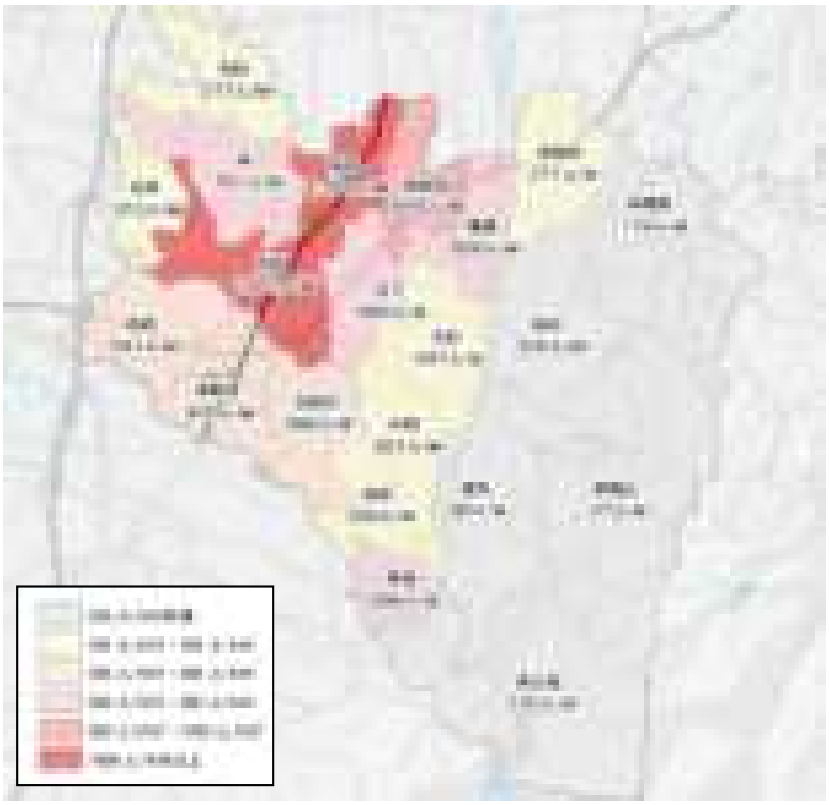
地区別人口は、市街地の出町地区が 8,921 人で最も多く、次いで油田地区が 4,921 人、林地区が 4,467 人となっています。一方、山間部の栴檀山地区（358 人）や雄神地区（711 人）、平野部では若林地区（676 人）の人口が少なくなっています（令和５年８月末現在）。

地区別人口密度は市街地の人口密度が高く、庄川右岸地域の人口密度が低くなっています。

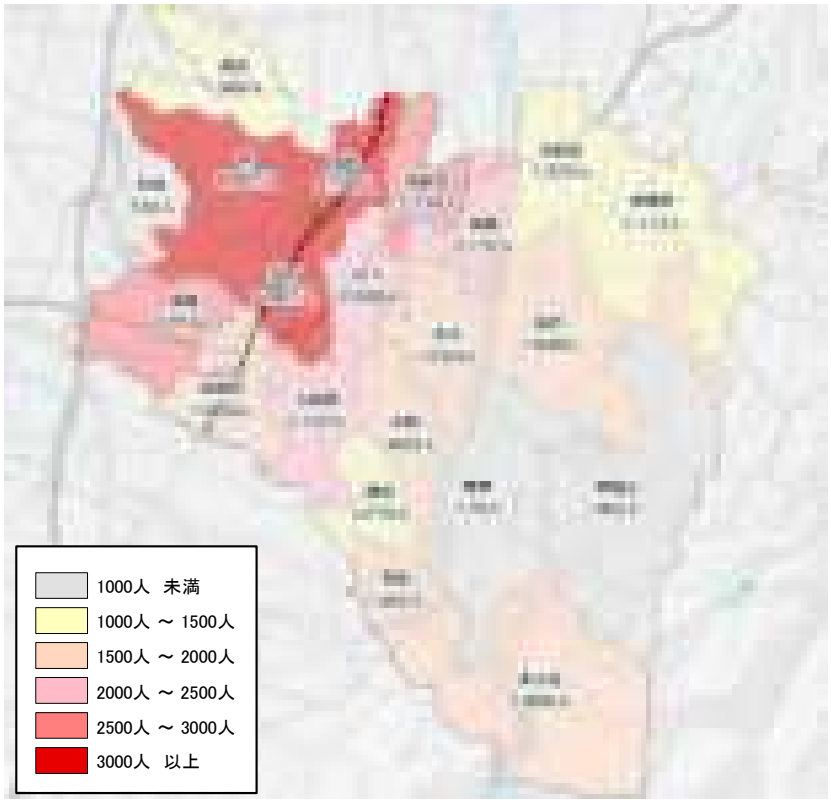
人口密度



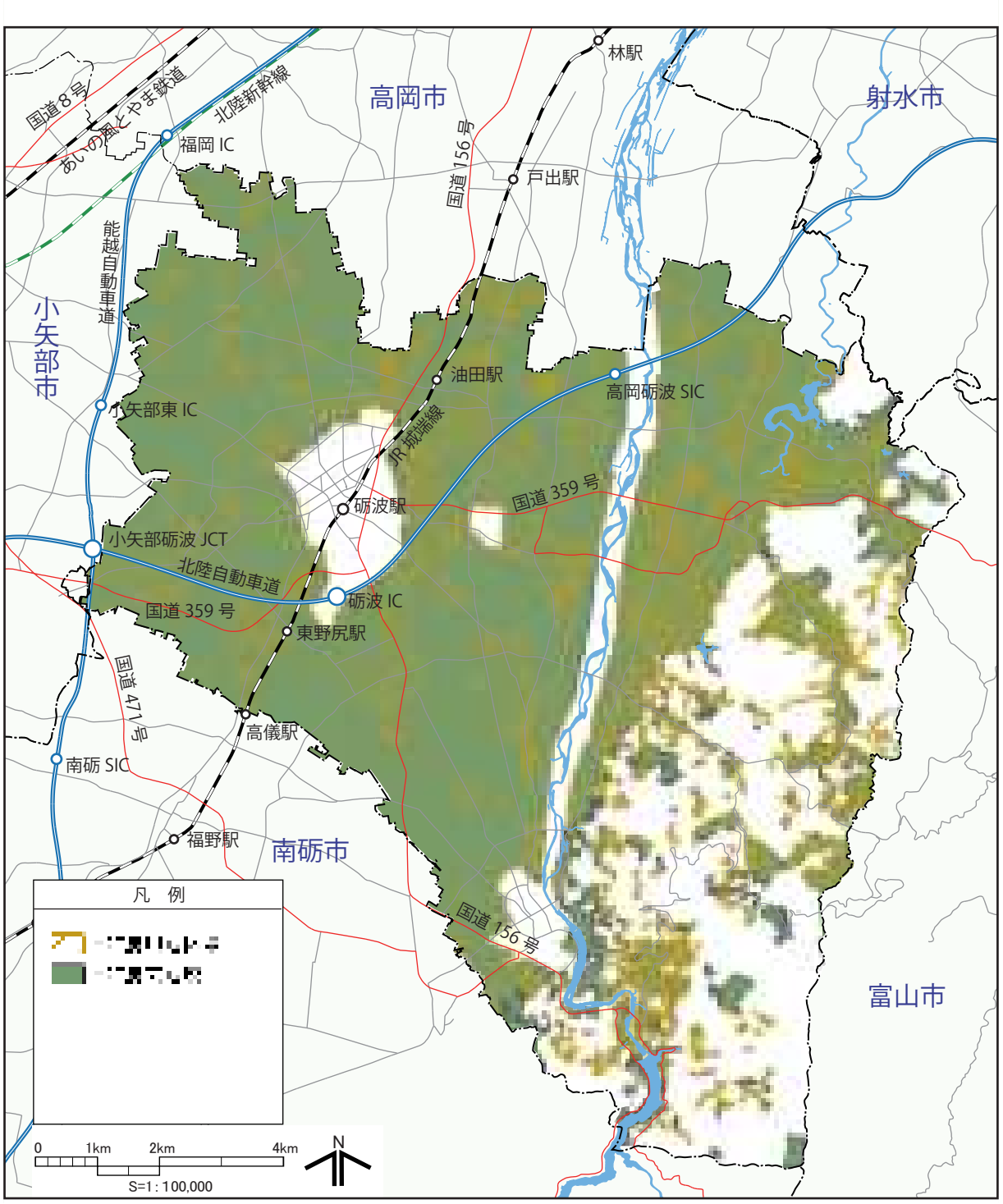
用途地域図
（国土数値情報 H28 より）



地区別人口密度（令和３年）
（砺波市住民基本台帳人口：令和３年３月末現在）



地区別人口数（令和３年）
（砺波市住民基本台帳人口：令和３年３月末現在）


高岡市
射水市
小矢部市
南砺市
富山市
林駅
戸出駅
油田駅
福岡 IC
小矢部東 IC
小矢部砺波 JCT
砺波 IC
砺波駅
東野尻駅
高儀駅
福野駅
南砺 SIC
高岡砺波 SIC
国道8号
あいの風とやま鉄道
北陸新幹線
能越自動車道
国道156号
JR城端線
国道359号
北陸自動車道
国道471号
凡　例
0
1km
2km
4km
S=1:100,000
N

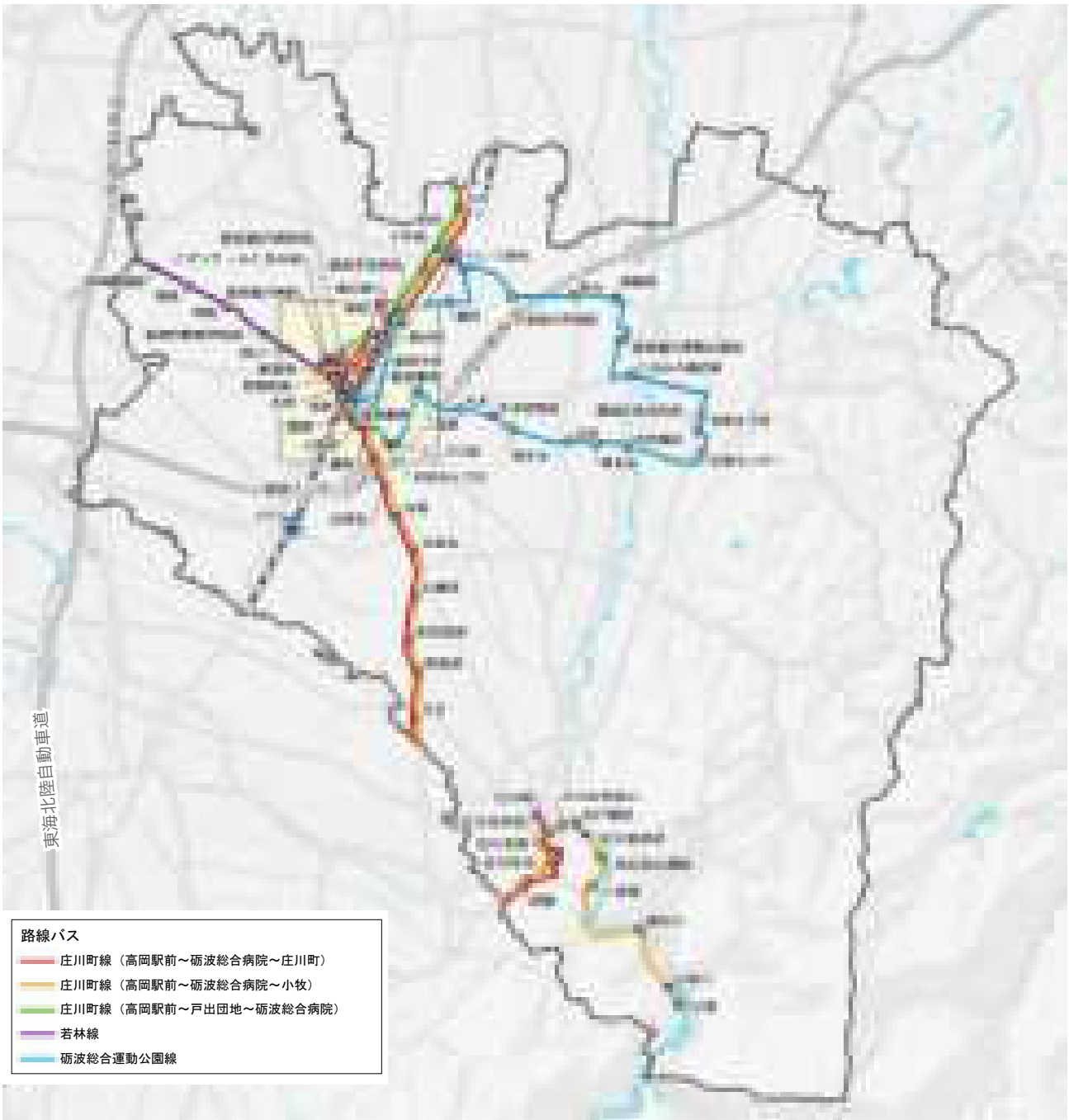
砺波市の農業地域図

(5) 交通

高速道路　本市の道路交通体系の骨格は、高速道路では北陸自動車道・東海北陸自動車道・能越自動車道、国道では 156 号と 359 号によって形成されています。また、高速道路には砺波 IC と高岡砺波スマート IC、高速道路の交差部には小矢部砺波ジャンクションが設置されています。

鉄　　道　公共交通体系のうち、鉄道については、ＪＲ城端線が市域を斜めに縦断しており、市内には油田駅、砺波駅、東野尻駅の３駅があります。

バ　　ス　バスについては､高速バスが７路線運行されています。路線バスは３路線が運行されており、高岡市と砺波市を結ぶ庄川町線、小矢部市と砺波市を結ぶ若林線、市内を運行する砺波総合運動公園線があります。市営バスは８路線が運行されており、各地区と中心市街地を結ぶ区間で



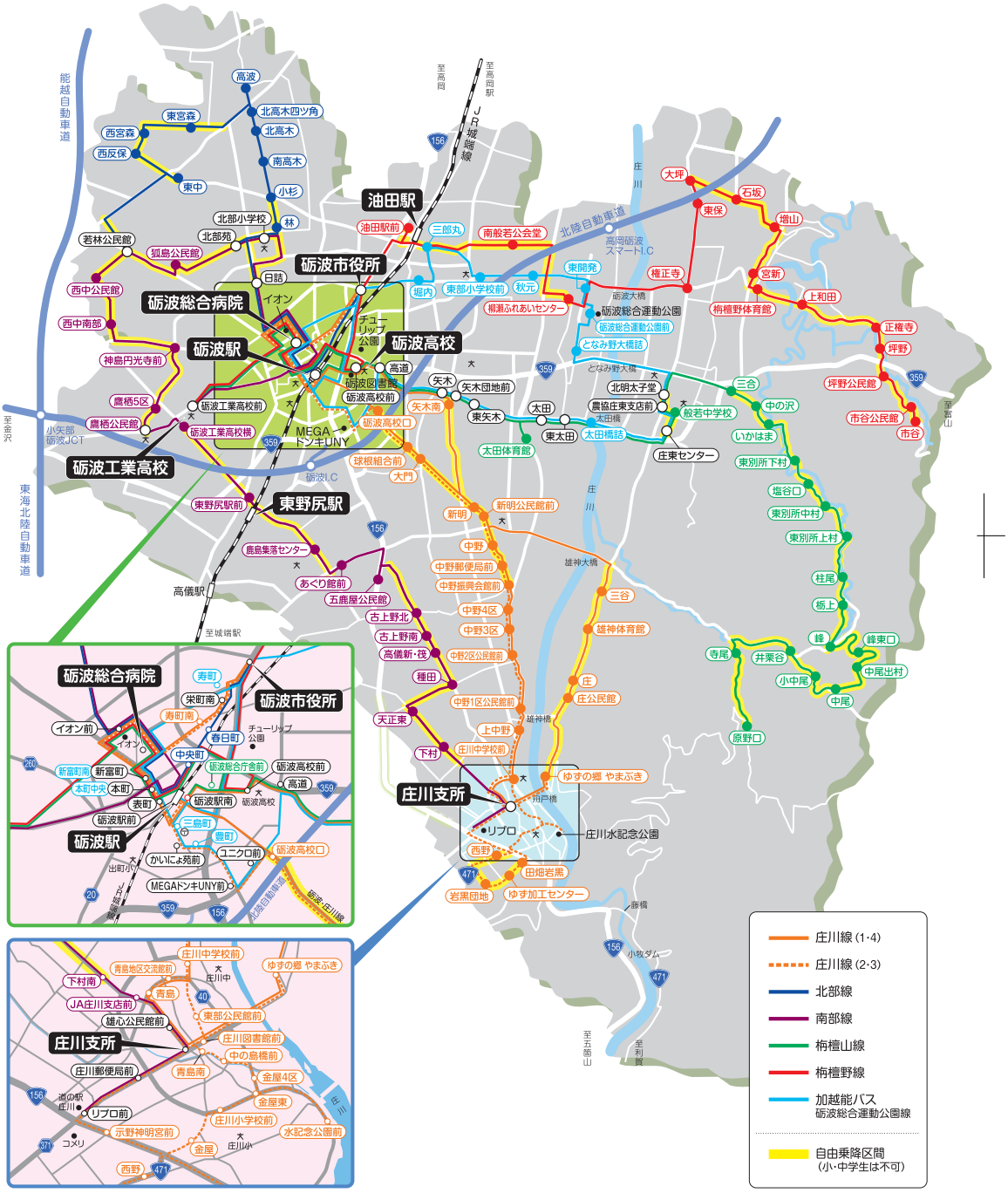
市内の地域公共交通網図（1）　（『砺波市地域公共交通計画』）

1日あたり2～6便運行されています。

デマンド型乗合交通

デマンド型乗合交通「チョイソコとなみ」は、自宅前に迎えがきて、指定停留所で乗降する乗り合い送迎サービスであり、月曜から土曜まで1日あたり6便運行しています。

このように、本市には各種の交通体系が形成されているものの、移動手段の多くを自動車が占めており、自動車に依存している状況にあるため、鉄道やバスなどの公共交通を移動手段として利用する割合は全体として低い傾向にあります。しかし、少子高齢化が進行する中、高齢者の移動手段の確保や小中高生の通学手段の確保等の課題を解決するため、デマンド型乗合交通「チョイソコとなみ」など新しい公共交通の利用促進が求められています。



市内の地域公共交通網図（2）

（『令和6年4月1日改正砺波市市営バス運行路線図』を一部改変）

（6）文化財に関連する施設

登録博物館

登録博物館である砺波郷土資料館は、本市の歴史文化や民俗に関する資料の収集・保存、展示・普及啓発、調査・研究をおこなっています。散村景観が特色でもある本市には、展示・普及啓発活動をおこなうとなみ散居村ミュージアムに、調査・研究活動をおこなう砺波散村地域研究所が併設されています。

茅葺き屋根

散村を構成する家屋として保存されているのが、出町地区にある旧中嶋家とかいにょ苑（旧金岡家住宅）です。いずれも茅葺き屋根住宅で、市指定文化財になっており、江戸時代中期から後期にかけての砺波地方の大型農家住宅の姿を体感することができます。砺波市出町子供歌舞伎曳山会館では、県指定文化財である出町子供歌舞伎曳山で使用する曳山３基を展示するとともに、獅子舞や夜高祭りを紹介しています。

曳山３基

増山城跡

般若地区にある砺波市埋蔵文化財センター（愛称：しるし）では、市内の遺跡から出土した考古資料を展示しつつ、小学生を対象に体験イベントを定期的におこなっています。栴檀野地区にある国指定史跡・増山城跡のそばに、城の紹介と休憩施設をかねた増山陣屋があります。その近くには、多くの文化財を所蔵する古刹・千光寺があります。

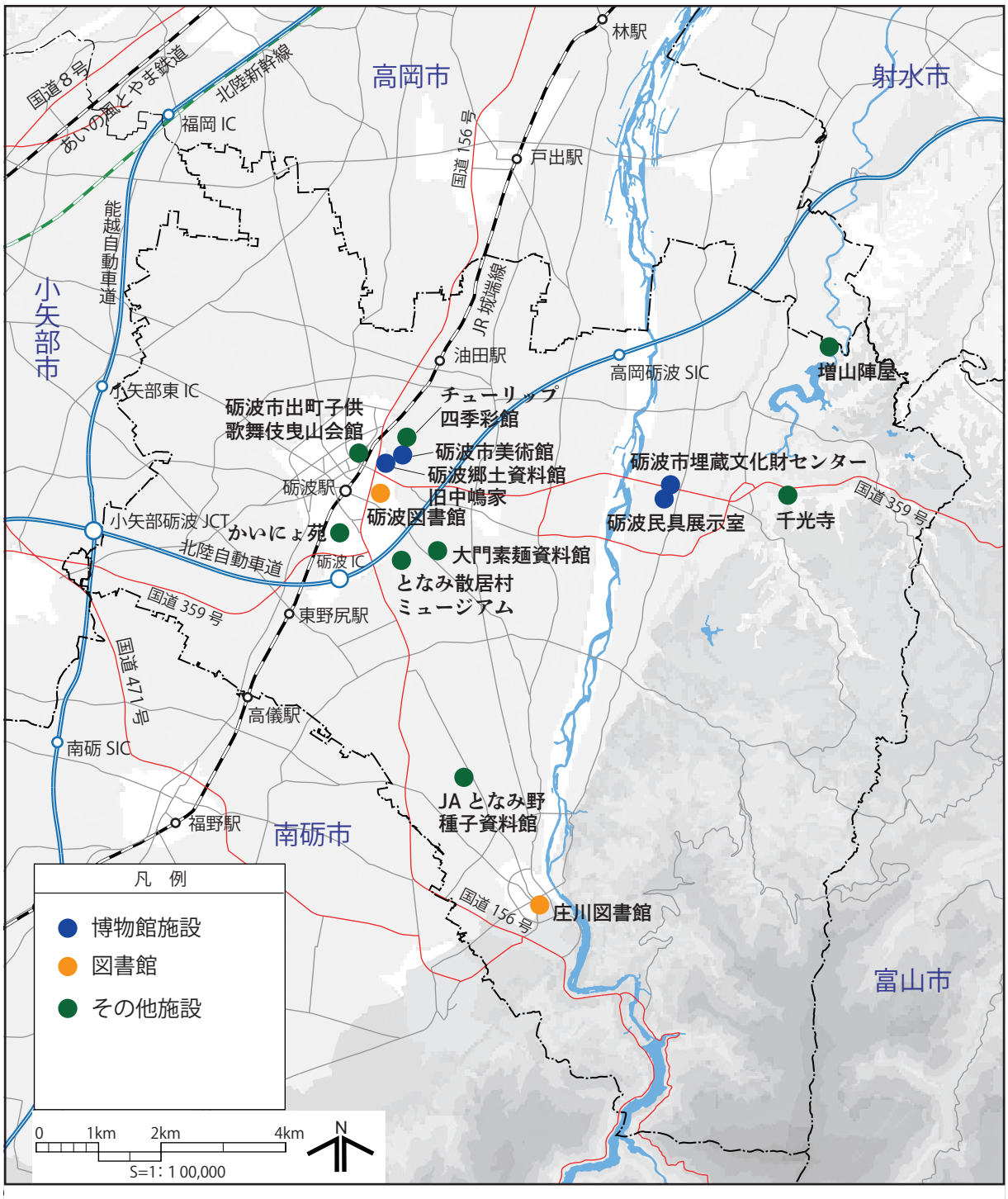
油田地区にある若鶴酒造の大正蔵は、砺波市ふるさと文化財に登録されています。敷地内に

施設名	運営主体	建築（開館）年度		備　考
		和暦	西暦	
砺波市出町子供歌舞伎曳山会館	砺波市	平成 21	2009	200 年を超える「出町子供歌舞伎曳山」の三基の曳山を中心に、資料や衣装・小道具類の展示公開と、豊かな祭文化を紹介
砺波市美術館	砺波市	平成 9	1997	チューリップ公園東に隣接。「アートスペース砺波」、「となみ野美術展」などの活動を継承した文化的創造活動の拠点
かいにょ苑	砺波市	平成 15	2003	砺波市指定文化財（旧金岡家住宅）。「かいにょ」（屋敷林）をもつ散居の農家の姿を後世に伝える。生涯学習の場として活用
砺波市埋蔵文化財センター	砺波市	平成 27	2015	砺波市を代表する考古資料を子どもにわかりやすく展示。組紐作りやペーパークラフト制作などの体験ができる。
砺波民具展示室	砺波市	平成 27	2015	砺波市立庄東小学校３階フロア全体を使用した博物館。砺波地方の民具約 7,500 点を収蔵展示
増山陣屋	砺波市	平成 25	2013	増山城跡のパンフレットやパネル展示があるトイレ付き休憩所
砺波郷土資料館	砺波市	明治 42 昭和 58 （開館）	1909 1983（開館）	砺波市指定文化財（旧中越銀行本店）。明治洋風建築の代表的な建物。昭和 54 年にチューリップ公園内に移築
旧中嶋家住宅	砺波市	18 世紀中ころ		砺波市指定文化財。18 世紀中ごろの建築で、この地方の古い農家の様式を示す典型的な建物。昭和 51 年にチューリップ公園内に移築
となみ散居村ミュージアム	砺波市	平成 18	2006	となみ野田園空間博物館の中核施設で、4 館からなる博物館。 民具館 (H21 開館) には明治期から昭和 30 年ごろまでの民具を展示
千光寺	千光寺	昭和 45	1970	真言宗寺院。開基 大宝 3 年（703 年）砺波地域でもっとも古い寺とされ、闇魔像を安置する寺としても知られている。
入道家住宅	個　人	嘉永 6	1853	富山県指定文化財。屋敷林をそなえた大規模民家。砺波平野の散村に多くみられるアズマダチ建築の典型例として貴重な建築
チューリップ四季彩館	砺波市	平成 8	1996	砺波チューリップ公園に隣接し、富山県の県花、砺波市の市花であるチューリップの情報発信の拠点。園芸講座やボランティア・緑化活動を実施
JA となみ野種子資料館	JA となみ野	平成 21 （開館）	2009 （開館）	特産の種もみを PR する施設として開館。資料館は資料室と検査室があり、資料室では、種もみ生産の歴史や明治時代からの種もみ品種、収穫から出荷までの行程などをパネルで分かりやすく紹介
大門素麺資料館	庄下自治振興会	平成 30 （改修）	2018 （改修）	旧正行寺（砺波市大門）本堂跡に、砺波市の特産「大門素麺」に関する資料や道具を保存・展示。そうめん作りの工程を精巧に再現したジオラマ人形も並べ、大門素麺の歴史と作業内容を分かりやすく紹介
若鶴酒造三郎丸蒸留所	若鶴酒造	平成 29	2017	文久 2 年（1862 年）より酒造業を営む若鶴酒造が 1952 年よりウイスキーを製造してきた蒸留所を改修し、2017 年に「三郎丸蒸留所」としてオープン。蒸留所の歴史や製造工程に関する展示や、世界的にも珍しい鋳型製蒸留器を間近で見られる見学ツアーを実施

文化財関連施設一覧

あるウイスキー蒸留施設である三郎丸蒸留所とともに常時見学ツアーの受け入れをおこなっており、産業観光ができる施設として注目されています。素麺生産が盛んな庄下地区には、大門素麺資料館があり、道具が展示されています。東山見地区の庄川水記念公園ふれあいプラザには、庄川に関する資料が展示されています。種もみの生産が盛んな種田地区には、JA となみ野種子資料館があり、種もみ生産の歴史や収穫から出荷までの工程を学ぶことができます。

また、砺波図書館・庄川図書館には歴史資料が収蔵されています。



文化財関連施設位置図

3　歴史的背景

(1) 旧石器・縄文時代　－約２万年前からの人々の営み－

ノマドの暮らし　市内の歴史は２万年前の旧石器時代から始まりますが、獲物を追って移動する遊動生活が続く間は、その活動は細々としたものでした。縄文時代中期の遺跡はたくさん見つかりますが、その後は少なくなっていきます。

立野ヶ原

砺波平野周辺における旧石器時代の遺跡は、小矢部川上流域の立野ヶ原台地一帯（南砺市）に集中して分布しています。市内では庄川右岸の庄東山地､芹谷野段丘にかけて遺跡が点在し、畑地などの地表に石器が散布した状態で見つかっています。芹谷遺跡では、これまで 100 点以上の石器が採集されています。その石器は「立野ヶ原型ナイフ形石器」[1]と呼ばれる小形剥片や、ナイフ形石器などで構成されています。石器の年代は、約２万９千～２万５千年前の巨大噴火で噴出した火山灰である姶良丹沢（AT）火山灰の降灰期に相当します。そのころから段丘や山地で人々の営みがはじまったのでしょう。

姶良丹沢火山灰

花ひらく縄文文化　市内では、芹谷野段丘の東を中心に縄文遺跡が濃密に分布していますが、平野部にも少しだけ点在しています。芹谷野段丘では厳照寺（ごんしょうじ）遺跡などが、和田川流域の段丘帯には高沢島Ⅰ・Ⅱ遺跡などがあります。

縄文時代の始まりである草創期は、福山大堤遺跡で表採された石器が唯一の資料として知られています。この石器は、濃飛流紋岩類という石材でつくられた「半月形石槍（はんげつがたせきそう）」とよばれるものです。これは両面が加工されている半月形の打製石器で、縄文時代のもっとも古い段階にみられる石器です。

半月形石槍

遺跡数増加

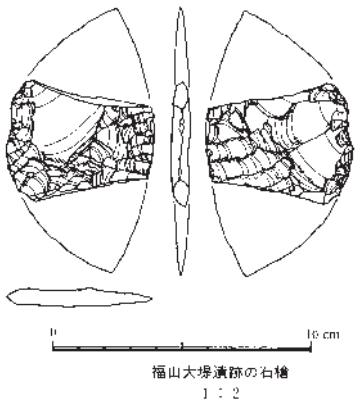
前期は増山遺跡などでわずかに出土例がありますが、県内の他の縄文遺跡と同じように、中期に属する遺跡は多く見つかります。

芹谷野段丘の縁にある厳照寺遺跡は、松原遺跡と並び市内の縄文遺跡としてもっとも著名な

1　奥村吉信　1987「立野ヶ原石器群と米ヶ森技法」『大境』第 11 号　富山考古学会



芹谷遺跡の石器



福山大堤遺跡の石槍



厳照寺遺跡の近景

中期の遺跡です。出土した土器は、縄文土器の年代的序列をあらわす編年「厳照寺Ⅰ式･Ⅱ式･Ⅲ式」として中期前葉の標式となっていましたが、現在は「新保･新崎式」に含まれています。

標式遺跡

遺構では、竪穴建物跡 11 棟・埋甕 1 箇所・穴などが検出され、弓のように住居が配置される「弧状集落」であることがわかりました[2]。弓のように建物を配置することで、集落の中心に広場をつくられました。この広場は公共的な空間で、さまざまな営みが行われていました。

弧状集落

また、低地の扇状地上では、芹谷野段丘をえぐる谷口付近に遺跡があるほか、扇状地扇央部に遺跡が点在します。久泉遺跡では打製石斧が多く出土していますが、これは自然薯（じねんじょ）やユリの根などの根菜類を掘る際に使った道具とみられます。これまでに扇央部の集落は未発見なので、おそらくふだんは段丘上や山地で生活し、食料を求めて扇央部に来ていたとみられます。

掘る道具

扇央部とは異なり、扇頂部には中期前葉から中葉の大規模集落である松原遺跡があります。庄川左岸の最下位段丘上にあり、遺物・遺構の質・量ともに豊富な遺跡として知られています。大きな川の近くにあり、山にも近いことから食料採集に適していたとみられます。

竪穴建物は、方形石組炉を伴う建物や長軸 11m をこえる大型建物など 10 数棟が見つかっています[3]。04 号竪穴建物からは、多くの土器とともに打製石斧、磨製石斧、石錘、擦石、石鏃が出土しています。石錘という網のおもりが多いので、川で魚を獲って生活していたのでしょう。土器は、中期前葉から中葉（新崎式～上山田・天神山式）が主体を占めます。洪水の影響がない河岸段丘上という立地や、庄川に近く漁労活動で生計をなしえたこと、そして五箇山・飛騨に通じる交通の要衝に位置したことなどの条件が揃っていたことが、拠点集落となった要因とみられます。

拠点集落

縄文時代では、中尾遺跡から出土した御物石器が市指定文化財として福岡の厳照寺で保管されています。この石器は祭祀のための道具か、死者を葬る儀礼に使われたとみられます。

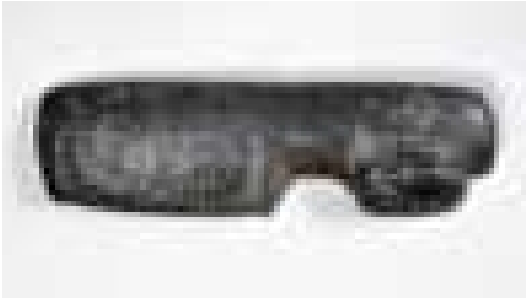
(2) 弥生時代・古墳時代　－空白の時代－

稲作の伝来　弥生時代の遺跡はほとんどありません。なぜなら、稲作が伝来したことで、人々の生活する場所が水を得にくい扇状地から扇端部の湧水帯に移ったからだとみられます。福山大堤遺跡や安川野武士Ａ遺跡Ｂ地点、増山城跡出土の弥生土器がありますが、その量はご

2　富山県教育委員会　1977『富山県砺波市厳照寺遺跡緊急発掘調査概要』
3　庄川町教育委員会　1975『富山県庄川町松原遺跡緊急発掘調査概報』



松原遺跡出土の縄文土器



中尾遺跡出土の御物石器

弥生土器

くわずかです。婦負郡や射水郡に連なる丘陵地帯や低位段丘上、扇状地に点在する黒色土（マッド）上などに未発見の遺跡が存在する可能性がありますが、総量は多くはないでしょう。

古墳はわずか　和田川のそばにある高沢島Ⅲ遺跡では、古墳時代後半の土師器の甕や高杯の一部が出土しています。また、増山城跡内の又兵衛清水付近からは、古墳時代の土師器片が出土しています。池原には“丸山古墳”やかつて県指定史跡であった“狐塚古墳”がありますが、前者は現在古墳と見る研究者は少なく、後者は中世に築かれた墳墓である可能性があります。周辺では小矢部川左岸流域から扇端部、佐野台地に遺跡が分布する傾向にあり、市域のある平野東部には古墳時代の遺跡はきわめて少ないのが現状です。

土師器

（3）奈良時代・平安時代　－米づくりのはじまり－

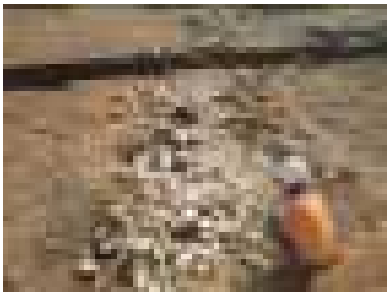
弥生時代から古墳時代にかけての空白期間ののち、市域では扇状地から段丘上にかけて古代の遺跡が出現しはじめます。いずれの遺跡も８世紀半ば以降で、それ以前の遺跡はほぼありません。これは、天平 15 年（743）に墾田永年私財法が発布されたことがきっかけで、平野東部に東大寺領荘園が成立した動きに連動したものと考えられます。そのときつくられた荘園は石粟荘、伊加流伎荘、井山荘、杵名蛭荘の四荘です。

東大寺領荘園

利波臣志留志の台頭　このころ、在地豪族である利波臣志留志（となみおみしるし）は、天平 19 年（747）、東大寺大仏建立にさいして米３,000 碩（約 1,200 石）を寄進して「外従五位下（げじゅごいのげ）」[4]の位を受け、神護景雲元年（767）にはさらに墾田 100 町を献じて「従五位上（じゅごいのじょう）」[5]の位を授かり、越中員外介（現在の副知事に相当）に任じられました。そして、東大寺荘園の検校[6]には専当国司[7]として名を

4　外位。律令制において地方官に授けられた、五位から初位までの 20 階の位の一つ。
5　内位。律令制において中央官司などに授けられた、正一位から少初位下までの 30 階の位の一つ。
6　荘園の役人
7　ある事項の処理を特定の国司の責任とする場合には、専当国司と称した。


久泉遺跡の大溝跡


徳万頼成遺跡の畦畔跡


東大寺大仏殿



銅造観世音菩薩立像（千光寺）

連ねていることから、荘園の成立や経営に大きな役割を果たしていたとみられます。志留志は宝亀10年（779）には伊賀守に任じられています。その後、利波臣一族は平安時代前期にかけて、砺波郡の郡司として権勢を誇りました。

伊賀守

「万葉集」によると、天平勝宝2年（750）、越中国司である大伴家持は東大寺荘園を点検するために砺波郡をまわり、「やぶなみの里」の多治比部北里の家に泊まっています。北里は砺波郡の郡司主帳[8]をつとめた人物です。天平宝字3年（759）の「石粟村官施入田地図」の東に「従荊波往紵道」とあることから、紵と荊波の集落が石粟村の南に位置すると考えられ、やぶなみの里は現在も同名の神社がある市内の池原にあったとみられます。したがって北里の家もそのあたりにあったとおもわれます。

大友家持

石粟村

天平宝字3年（759）の「伊加流伎野地開田地図」に「木波道」と書かれていますが、それより南にあった井山村の神護景雲元年（767）の地図にも南北に通じる道があり、南は「往木波村道」とあります。これによって、木波村の北に井山村があり、さらにその北に伊加流伎野（伊加流伎荘）が位置していたことがわかります。木波の地名は、庄川の流入により現在は失われていますが、中世から近世初頭にかけての文書に「木波郷」「木並郷」がみえ、雄神神社旧社地（弁財天社）の北あたりと推定されています。

木波道

伊加流伎野

古代寺院としては、芹谷山千光寺が知られています。千光寺は大宝3年（703）天竺の僧法道上人の開基と伝えられており、白鳳時代の小金銅仏である銅造観世音菩薩立像が安置されています。ほかには厳照寺の境内から瓦が出土していたり、増山城跡二ノ丸に塔心礎とおもわれる神水鉢があり、古代寺院が千光寺以外にも存在した可能性があります。

千光寺

砺波七座　延喜式内社としては砺波郡に七座ありますが、市域には、荊波神社、林神社、比賣神社、雄神神社の四座があります。雄神神社は水の神である高靇を主神とする古社で、神護景雲元年の井山村墾田地図に「雄神分」として神田が記されています。雄神[illegible]（795）に高瀬神・二上神とともに従五位上に叙せられています。「万葉集」に

8　律令制において郡などの文書の起草・受理をつかさどった役職。



増山城跡二ノ丸の神水鉢



荊波神社



千代遺跡の墨書土器

川の古名）はこの神名に由来するとおもわれます。のちに雄神庄が設定されて「庄」が地名となり、川名を庄川と呼ぶようになったと考えられます。

奈良時代

奈良時代に入ると遺跡が増えはじめます。芹谷野段丘上にある宮森新北島Ⅰ遺跡[9]では、桁行３間×梁間２間、面積 32 ㎡の掘立柱建物が検出されています。また、平野部では、高道向島遺跡、安川野武士遺跡、安川山下遺跡、薬勝寺遺跡、徳万遺跡、太田遺跡、秋元窪田島遺跡、宮村遺跡、千代遺跡、油田大坪遺跡、小杉遺跡がいずれも微高地のマッド上に存在しています。周囲より少し高い場所に集落をつくっていたようです。

官衙

久泉遺跡の大溝　平野中央にある久泉遺跡では、長大な大溝と建物遺構群などが検出されていますが[10]、遺跡の存続時期は８世紀後半から９世紀前半と 100 年もありません。建物は規則的に配置された掘立柱建物４棟と大小さまざまな規模の竪穴建物 14 棟で構成されます。建物の長軸方向（桁行）が 10 ｍを超える掘立柱建物の規模や、整然と並ぶその配置は古代の役所である「官衙」の要素も含まれます。加えて、竪穴建物の一部には鍛冶工房と思われ、単なる一般的な集落と評価することはできません。また、大溝は、溝底から８世紀第Ⅲ四半期に帰属する須恵器（有台杯）が出土しており、その時期に開削されたと考えられます。大溝は発掘によって幅 6.9 ～ 10 m、最深部 1.55 m、延長 120 ｍを検出しましたが、地中レーダ探査により約 2.0 ㎞の延長を確認しています。この遺跡は、東大寺領伊加流伎荘の比定地の南西に位置しており、大溝は荘園方向に流れていることがわかっています。以上のことから、大きな溝と役所に近い建物群は、溝を管理する施設「溝所（みぞどころ）」とみられます。

梅檀野窯跡群

須恵器の生産　荘園の成立と同じころ、市内の丘陵帯では大規模に須恵器の生産が行われました。その痕跡として、須恵器の窯跡群が芹谷野段丘から庄東山地にかけて分布しています。それらを総称して梅檀野窯跡群といいます。これまで計 16 遺跡で窯が確認されており、多くは平野に面する丘陵西側斜面に立地しています。もっとも早く操業されたのは宮森窯（８世紀第Ⅱ四半期）で、窯跡群全体では８世紀後半から９世紀にかけて生産が盛んに行われ、10 世紀頃に衰退期を迎えることがわかっています。

9　富山県教育委員会　1978 『富山県砺波市宮森新北島Ⅰ遺跡緊急発掘調査概要』
10　金田章裕　2007 「久泉遺跡における大溝・建物遺構の性格」『久泉遺跡発掘調査報告Ⅲ』砺波市教育委員会



安川天皇窯跡発掘時の様子



福山窯跡出土品



般若野荘の遠景



(4) 鎌倉～安土桃山時代　－荘園経営と争乱－

治承・寿永の源平争乱　寿永 2 年（1183）、木曽に兵を挙げて京を目指した源義仲の軍勢と、これを討つために北上してきた平維盛の軍が、加賀・越中の境の倶利伽羅峠で激突し、夜襲によって大勝した義仲勢は勢いに乗って京へ上りました。このとき越中の在地豪族は挙げて義仲に味方しています。この倶利伽羅の戦いの前哨戦として般若野の戦いがあります。この戦いは、義仲の先遣隊である今井兼平の軍が、般若野で休んでいた平盛俊の平氏軍を攻撃し、敗走に追い込みました。

源　義　仲

鎌倉・室町時代を通して史上に現れる荘園に、般若野荘と油田条があります。

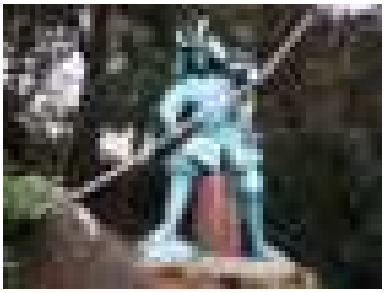
般若野荘　般若野荘は、現在の庄川の両岸である梅檀山・梅檀野・般若・東般若・般若・太田・柳瀬および、南般若・北般若（高岡市）の各地区にまたがる広大な地域でした。おそらく平安時代末期から京都の徳大寺家の家領となったようで、史料上の初見は文治 2 年（1186）に「吾妻鏡」に登場します。

吾　妻　鏡

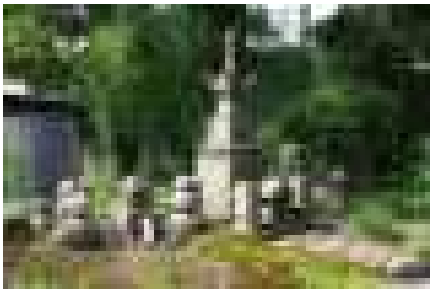
以後、中世を通して同家の所領で、領家と地頭が土地を折半する下地中分をしながらも中世末まで荘園は続いています。しかし、室町時代に入ると年貢の未納がしばしばあり、文明 6 年（1474）、徳大寺実淳は家領保全のために般若野に下向し、孫の実通も天文 3 年（1534）に下向、さらに天文 14 年（1545）にも出向いていますが、このとき荘民に殺害されてしまいました。加害者は、雄神荘の石黒氏、越中守護代で増山城を支配した神保氏、すでに一向衆徒化していた在地農民などが考えられますが、はっきりとわかっていません。

越　中　下　向

しかし、これは荘園崩壊期の様相を示す象徴的な事件であったといえます。現在、安川の般若山薬勝寺の近くにある公卿九人塚が実通と従者の塚であると伝えられています。



弓の清水にある木曾義仲像



公卿九人塚



柳瀬比賣神社出土の石造物

承久の乱　般若野荘では治承・寿永の源平争乱のほか、承久の乱でも戦闘が行われています。承久 3 年（1221）6 月、名越朝時らの北陸道軍は般若野まで進攻し、京方（後鳥羽上皇方）との合戦になりました。京方軍は敗れ、勝利した鎌倉勢は同年 6 月中旬に入京し、幕府は京都監視のために六波羅探題を設置しました。

荘域にある東保遺跡（東保高池遺跡）では、12 世紀後半から 13 世紀前半の土師器が多量に出土していることから、たくさんの酒宴をおこなっていたのかもしれません。また、同遺跡からは墓地もしくは祭祀跡と考えられる集石状遺構も検出されています。秋元窪田島遺跡、正権寺遺跡は、ともに 15 世紀に位置付けられます。また、柳瀬比賣神社では奥殿の工事中に氷見藪田石製の石造物（随身坐像など 11 体）が発見されました。石造物の年代は 14 ～ 15 世紀とみられ、石動山信仰との関わりが指摘されています。

氷見藪田石

油田条　油田条は庄川扇状地の扇央部ではありますが、比較的安定した土地で、奈良時代末から平安時代頃の須恵器が出土する地帯です。史料上の初見は弘安元年（1278）、関東御家人の平賀惟長から弟惟致への譲状です。その後、建武中興の頃には冷泉家の家領となり、さらに寛正 3 年（1462）には京都安楽院の寺領となっています。

冷泉家

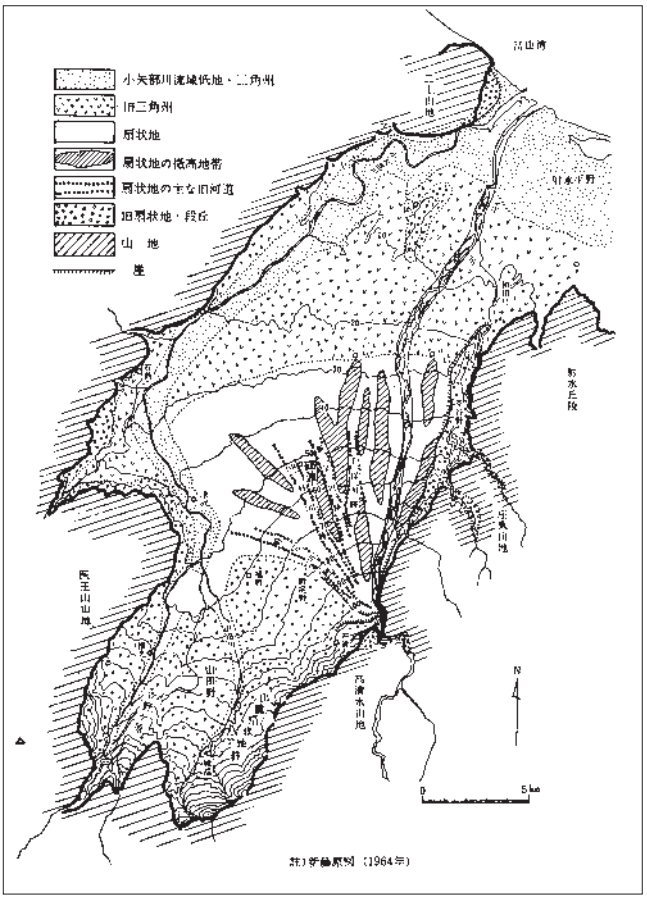
増山城　増山城は越中守護代神保氏累代の居城です。足下に和田川の深い渓流をめぐらす山城で、戦国時代には常に戦乱の渦中にありました。貞治２年（1363）の二宮円阿軍忠状に「和田城」を警固した記されており、この城が増山城の前身だと考えられています。永正 3 年(1506)越後の長尾能景（上杉謙信の祖父）は神保慶宗とともに一向一揆と戦いましたが、敗死しまし

和田城



増山城跡の遠景


増山城下町の出土遺物



砺波平野の地形と旧河道

た。その後、神保長職が富山城の支城として整備しましたが、永禄３年（1560）、長尾景虎（のちの謙信）の越中出兵により落城、さらに２年後の永禄５年（1562）にも上杉輝虎（のちの謙信）に攻められ、城の周辺に放火されました。長職が没したのち、天正４年（1576）には七尾城に攻め上がる途上で謙信に攻略され、謙信没後は北陸を進攻してきた織田信長勢によって攻められ、越中平定を果たした佐々成政の支配下になりました。

このとき城はもっとも整備拡充されたといわれています。しかし成政は豊臣秀吉に敗れ、城は前田利家・利長の領有となりました。前田家の重臣、中川光重（巨海斎宗半）が城代を務めました。光重は不在期間が長く、実質的には妻の蕭（しょう）が城を守ったと伝えられています。その後、蕭が没した慶長８年（1603）頃に廃城になったとみられます。

（7）江戸時代　－川跡の開拓と農村の展開－

江戸時代がはじまる直前の天正 13 年（1585）、前田利家・利長父子が越中国砺波郡・射水郡・婦負郡を領有して以降、砺波郡は加賀前田家の支配となりました。また同じ年、砺波郡には大きな変動がありました。それは 11 月 29 日、越中・飛騨から伊勢にかけて大地震（天正地震）が発生し、庄川上流で山崩れのため溜まった水が一気に流れ出て、当時千保川を主流としていた水流が二つに分かれ、一筋が東に移って現在の庄川の流路ができました。のちに３代藩主前田利常は、今まで西へ流れていた庄川の諸分流をしめきって、この新しい流路へ全水量を移しました。これによって下流の高岡町および砺波平野は水害から安定し、旧河道は用水として整備されたので、平野の開拓が急速に進みました。

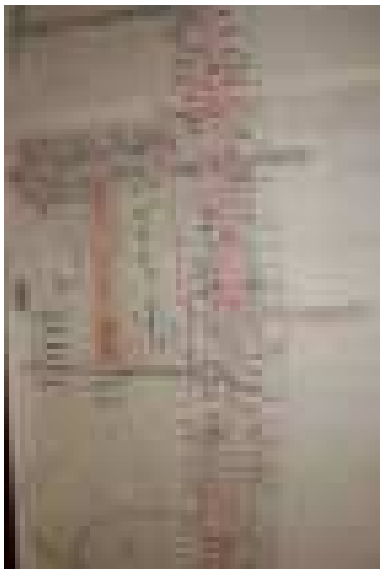
天正地震

川跡の開拓　川跡の開拓としては、中村川跡を開いた鷹栖出村（貞享２年（1685））、新又川跡の新又・坪北新・荒屋新・高儀出（貞享～元禄年間頃）や、文政３年（1820）の舟戸に用水開削以後急速に進んだ千保川跡の広大な新開があります。また、庄川の東の芹谷野段丘は砺波郡の十村・川合又八と射水郡の十村・島村九郎兵衛の協力によって開拓されました。二人は寛

千保川跡



芹谷野用水取入口



天保６年（1786）中町西部屋兵四郎製図の出町絵図（個人蔵）



砺波平野における町立て

文３年（1663）、射水平野の灌漑と芹谷野段丘の開墾のために庄川で取水し、段丘上を北流して射水平野へ落ちる用水路開発を発案し、藩の許可を得て芹谷野用水を開きました。この事業は、藩の助力もありましたが、時期が良かったことから、翌年には20の新村ができ、ほぼ開拓の終わった元禄年間（1688～1704）頃には、あわせて25の新村と４,000～5,000石の村高を数えるに至りました。

芹谷野用水



十村安藤家の多門

出町の誕生　砺波平野の町々は、江戸時代の初めにいっせいに生まれています。本市の中心市街地である出町（杉木新町）も慶安２年（1649）に成立しています。杉木村二郎兵衛を筆頭に、太郎丸村七郎兵衛ら16名が連署して藩へ町立て（町の建設）の願書を提出したのは１月27日で、これはただちに許可され、雪解けを待って３月には早くも検地を受けて町の区割に取りかかりました。計画では長さ300間・幅80間、ここに100軒を建てるとあるので、中央に道を設けると１軒あたり平均間口６間・奥行40間となります。この区割はほぼ現在の街並みに引き継がれています。

町立て

戸数は延宝年間頃（1673～1681）に予定の100戸近くになり、以後、文政２年（1819）158戸、嘉永４年（1851）201戸、幕末には町続きの村の連担戸数を加えて245戸となりました。戸数をみると町として順調に発展していったようにみえますが、砺波平野の他の町に比べて決して多いとはいえません。それは輸送の動脈ともいうべき舟運に恵まれなかったことによると思われます。藩の年貢米を収納する御蔵は、砺波平野ではいずれも小矢部川およびその支流沿いの町に置かれていましたが、杉木新町はこれから離れていたのです。わずかに藩士の知行米を扱う町蔵宿が元禄11年（1698）に認められたにすぎません。

御蔵

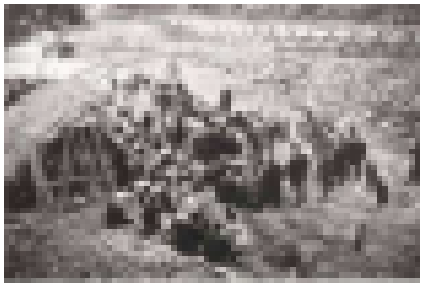
しかし、砺波平野の中央に位置することから、行政的には砺波郡の中心的な性格を持ってきました。17世紀の半ばに改作法[11]の施行に伴って十村制度が充実してくると、寛文６年（1666）には砺波郡の十村寄合所（寛文８年から十村相談所と改称）が置かれ、郡内の十村が毎月集まって農事の奨励など職務上の協議をしたり、軽い民事を裁いたりしました。その後、文政４年（1821）には郡奉行の出張所である砺波御郡所が置かれ、明治以降、郡治局をはじめ国や県

十村寄合所

11　慶安４年(1651)から明暦２年(1656)にかけて加賀藩５代藩主前田綱紀の後見をしていた前田利常(３代藩主)が行った農政改革。改作奉行・十村制を中核とした地方支配機構の整備、救民制度の充実が主な内容である。



神田商店の土蔵群



材木の流送の様子



松川除一番堤道

の出先機関が設置される布石となりました。

加賀藩の農村制度　十村の所管する村組は、はじめは便宜的なものでしたが、元和2年（1616）・寛永12年（1635）の組寄せを経てしだいに整備され、改作法の進行に伴って承応元年（1652）には砺波郡は10組となりました。市域の村々は、般若組・若林組・蟹谷組・石黒組に属した。この組割は長く続きましたが、天保10年（1839）、いわゆる天保の改革に関連して組替えが行われ、砺波郡は16組となり、市域では般若・庄下・若林・野尻・糸岡・山見の各組に含まれました。

砺波御郡所

藩の農村支配のうえで重要な役目をもった十村には、初期の寛永以前には太田村金子家、中条村川合家（のちに戸出町に移転）、開発村安藤家があり、以後、東保村菅野家、同前山家、宮丸村安藤家、金屋本江村長田家、権正寺村島家などがありました。また十村に準ずる山廻役には杉木新町高畠家がありました。

江戸時代の産業　産業としては米作が中心で、目立ったものはありませんが、ほかに麻布、木綿織、酒造があります。麻は文化元年（1804）に鷹栖屋五右衛門が周辺農家で生産される八講布の集荷商売をはじめ、幕末には神島屋（神田氏）が創業しています。砺波地方の木綿織は、文政初年（1818～）、福野村の寺島屋源四郎が桟留縞（さんとめじま）を導入したことに始まりますが、天保3年（1832）に源四郎が亡くなると、同村の四日屋吉左衛門がそのあとを受けて砺波郡の原料糸の御仕入人を勤めています。

庄川地域では、特産品として金屋臼、五ヶの種籾、金屋のユズとネギ、里山の和紙、石炭、金屋石などがありました。

庄川の流送　加賀藩のおこりとともに急激に木材の需要が高まったため、藩は庄川上流の五ヶ山・白川方面に材木を求めて庄川へ流しました。すでに文禄3年（1594）には金屋に藩の材木囲場（かこいば）が設けられ、用水を通して各地へ運ばれました。

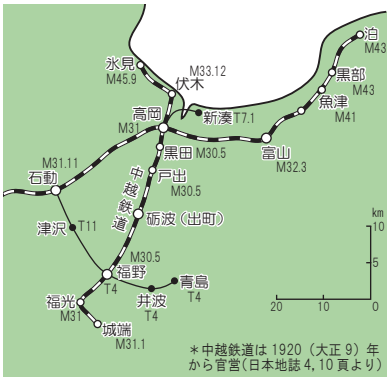
金屋石

庄川は農業用水や飲料水として、また材木の川下げや用水を通じての舟運など、多くの便益をもたらしましたが、その反面、雨期ごとに氾濫を繰り返しました。

承応年間（1652～1655）の頃から藩はこの治水に乗り出しました。今まで主流の千保川をはじめ、野尻川・中村川・新又川など西方へ流れていた分流をしめきって、平野東部の現在の庄川に一本化しようというものです。この工事は寛文10年（1670）本格的に着工し、45年の歳月をかけて正徳4年（1714）にようやく完成しました。現在、「松川除（まつかわよけ）」とよぶ堤防がこれにあたります。



米作りの様子



中越鉄道と県内の鉄道の開通



青島貯木場

松川除　新しい川筋になったところは村高が激減し、三谷村では御印高 1,340 石が天保 12 年（1841）には 676 石に半減しますが、庄川左岸の村々は大きく村高が増え、下流の村々でも廃川地を開拓して新村や新開地が増えました。

（8）近現代　－産業の発展とダム建設－

明治維新を迎え、次々と打ち出された諸改革のなかで、もっとも影響の大きかったものは地租改正でした。土地の所有権を確定し、地価の３％を租税として金納するものでした。その後、明治 10 年（1877）に 2.5%に引き下げられましたが、この地方では差額の帰属解釈をめぐって地主と小作の対立が生じました。このため県側が説得にまわりましたが、かえって小作人側を刺激して暴動が起こり、軍隊が出動してようやく鎮圧しました。だいたい地主の納める地租は金納で、小作が地主に納める年貢は米納であったので、米価が上がるにつれて地主の得分は大きくなり、地主制が進みました。この傾向は紙幣整理に端を発する明治 14 年（1881）からのデフレーションによって一時鈍化し、この間、新旧地主層の交替も生じましたが、明治 20 年代になって再び進行しました。疲弊した小作農民は当時、政府が政策としていた北海道開拓に従事するため、移民として北海道に渡るものも多くいました。明治 30 年代にこのピークを迎えています。

地租改正

一方、地主層は資本を集めて会社を作りました。明治 27 年（1894）から翌年にかけての日清戦争の頃に顕著にみられ、主なものに明治 27 年の出町米肥会社、同 28 年の中越鉄道・中越銀行、同 30 年の鷹栖銀行、変わったところでは同 34 年の庄川橋組合（有料橋）などがあります。

中越鉄道は明治 30 年（1897）の開通で、まだ国鉄北陸本線さえ富山県に延びていない時期でした。ここに、この地方の地主たちの盛んな意気をみることができます。大正 4 年（1915）、砺波鉄道（加越線）の福野～青島間が開通し、木材の搬出、ダム工事資材の輸送や住民の足として利用されましたが、昭和 47 年（1972）9 月に廃止となりました。

中越銀行

大正に入り、第 1 次大戦後の好況と工業化の進展によって、大正 7 年（1918）には若鶴酒造・出町麻織物・中越製布・北陸綿業、大正 8 年には金岡工業・橋本木工場、同 9 年には中越印刷など、新たに設立されたり、従来の企業を株式組織にしたものがこの時期に多くみられます。

第 1 次大戦

木材集散とダム　明治以後、庄川地域の産業で活況を呈したのは、木材の集散でした。明治に入って材木の川下げが民間に解放されると、飛騨高山の中尾洞七は、明治 7 年（1874）金屋・青島などの有志と図って飛騨材の川下げに成功しました。これをきっかけに地元の木材業者も事業を始め、明治 12 年（1879）頃の年間伐採量は 10 ～ 15 万石に上りました。この木材によって慶応２～３年（1866 ～ 1867）に庄川挽物木地の生産が興り、現在も伝統的工芸品として技術が伝えられています。また明治 40 年（1907）頃から動力製材所がいくつもできました。

川下げ



昭和初期の農村風景

大正 9 年（1920）、岐阜県に飛州木材が設立され、翌年富山県側の庄川木材ら３社を合併して庄川上流と下流を一体化した流木会社となりました。これと前後して浅野総一郎は庄川水力発電会社を設立し、小牧ダムの築造を計画しました。事業はその後、日本電力のテコ入れで大正 14 年（1925）に着工しましたが、流木が不能になるとすぐ飛州木材との間に争いが起こり、いわゆる庄川流木争議として泥沼の様相を続けましたが、ついに流木側が敗れ、昭和 5 年（1930）9 月、当時「東洋一」と謳われた小牧ダムが完成しました。

庄川挽物木地

またこれを機として庄川沿岸の各用水が取水口を 1 つにする合口ダムが計画され、昭和 14 年（1939）に完成しました。

小牧ダム

産業と農業　農業基盤の改良の上で大きな成果を上げたのは、庄川からの取水を合理化するための用水合口です。大正 5 年（1916）頃から取り組まれ、多くの曲折を経て昭和 15 年（1940）に完成しました。その後、第２次大戦後の農地改革、また昭和 40 年代の圃場整備事業と大型機械化によって農業経営の様子も大きく変貌しています。大正期に始まったチューリップ栽培は、戦後輸出球根として脚光を浴び、今では球根出荷量が全国一を誇るまでに成長しました。また昭和 27 年（1952）に始まった「となみチューリップフェア」は、現在は毎年 30 万人以上が訪れ、富山県を代表する観光イベントとして活況を呈しています。

合口ダム

砺波地方の農村景観で特徴的なのは、「散村（散居村）」です。各農家が 50m から 100m ほど離れて点在し、それぞれ周囲の水田を耕作しています。これは中世末から急速に進んだ庄川扇状地の開発において、農民が自分の開墾地の真ん中に「カイニョ」と呼ばれる屋敷林をめぐらした居を構え、その周囲を開いていったためです。そして、平坦で地形上の制約があまりなかったことと、網状に流れる水路があってどこへでも水を引けたことが有利にはたらきました。また、水田が住居の周囲にあることは管理上便利であったことから、現代まで散村の景観を維持してきました。

チューリップ

散村

散居村

市域では、昭和 38 年の東野尻地区をトップとして続々圃場整備が行われ、大型機械導入に対応しました。一方、市街地でも区画整理事業が進むとともに、庄川左岸の旧河川敷に工業団地が誘致されました。

昭和 48 年（1973）には北陸自動車道の砺波～小杉間が開通し、高速道路時代の第一歩が踏み出され、のちに北陸自動車道に東海北陸自動車道と能越自動車道が接続さ



工事中の小牧ダム



工事中の舟戸合口ダム

れました。

第２章　砺波市の文化財の概要と特徴

１　指定等文化財

(1) 指定等文化財の分類

本市では文化財保護法、富山県文化財保護条例（昭和 38 年 3 月 25 日富山県条例第 11 号）および砺波市文化財保護条例（平成 16 年 11 月 1 日条例第 84 号）に基づいて、それぞれ国・富山県・本市にとって重要な文化財を指定または登録されています。

総数６５件

本市には、令和 6 年（2024）3 月現在、65 件の指定文化財があります。そのうち、国による指定が 3 件、県による指定が 9 件、市による指定が 53 件となっています。これを種別にみると、有形文化財の建造物が 10 件、有形文化財の美術工芸品が 30 件、民俗文化財が 6 件、記念物の史跡が 10 件、記念物の名勝が 1 件、記念物の天然記念物が 10 件となっています。

登録文化財市登録制度

また、国の文化財保護法では、文化財登録原簿に登録して保存と活用を図る登録文化財の精度があり、本市では 5 件の登録文化財（建造物）があります。

本市では平成 23 年（2011）から独自の登録文化財制度として「砺波市ふるさと文化財」を運用してきましたが、令和 4 年（2022）4 月 1 日に施行された文化財保護法の改正によって地方公共団体による文化財の登録制度が設けられたことを受け、砺波市文化財保護条例の中で「登録ふるさと文化財」を設けることになりました。

一方、本市においては、無形文化財および文化的景観、伝統的建造物群、選定保存技術に指定、あるいは選定されているものはありません。

■ 砺波市の指定および登録の文化財件数

類型			国		県		市		計	
			指定選定	登録	指定	登録	指定	登録		
有形文化財	建造物		0	5	2	–	8	0		15
	美術工芸品	絵画	0	0	3	–	0	0	3	30
		彫刻	1	0	1	–	9	0	11	
		工芸品	0	0	0	–	3	0	3	
		書跡・典籍・古文書	0	0	1	–	7	0	8	
		考古資料	0	0	0	–	4	0	4	
		歴史資料	0	0	0	–	1	0	1	
無形文化財			0	0	0	0	0	0		0
民俗文化財	有形の民俗文化財		1	0	0	–	3	0		4
	無形の民俗文化財		0	0	1	0	1	0		2
記念物	遺跡		1	0	0	–	9	0		10
	名勝地		0	0	0	–	1	0		1
	動物・植物・地質鉱物		0	0	1	–	7	0		8
文化的景観			0	–	–	–	–	–	–	0
伝統的建造物群			0	–	–	–	–	–	–	0
計		（指定）	3	–	9	–	53	–	65	70
		（登録）	–	5	–	0	–	0	5	

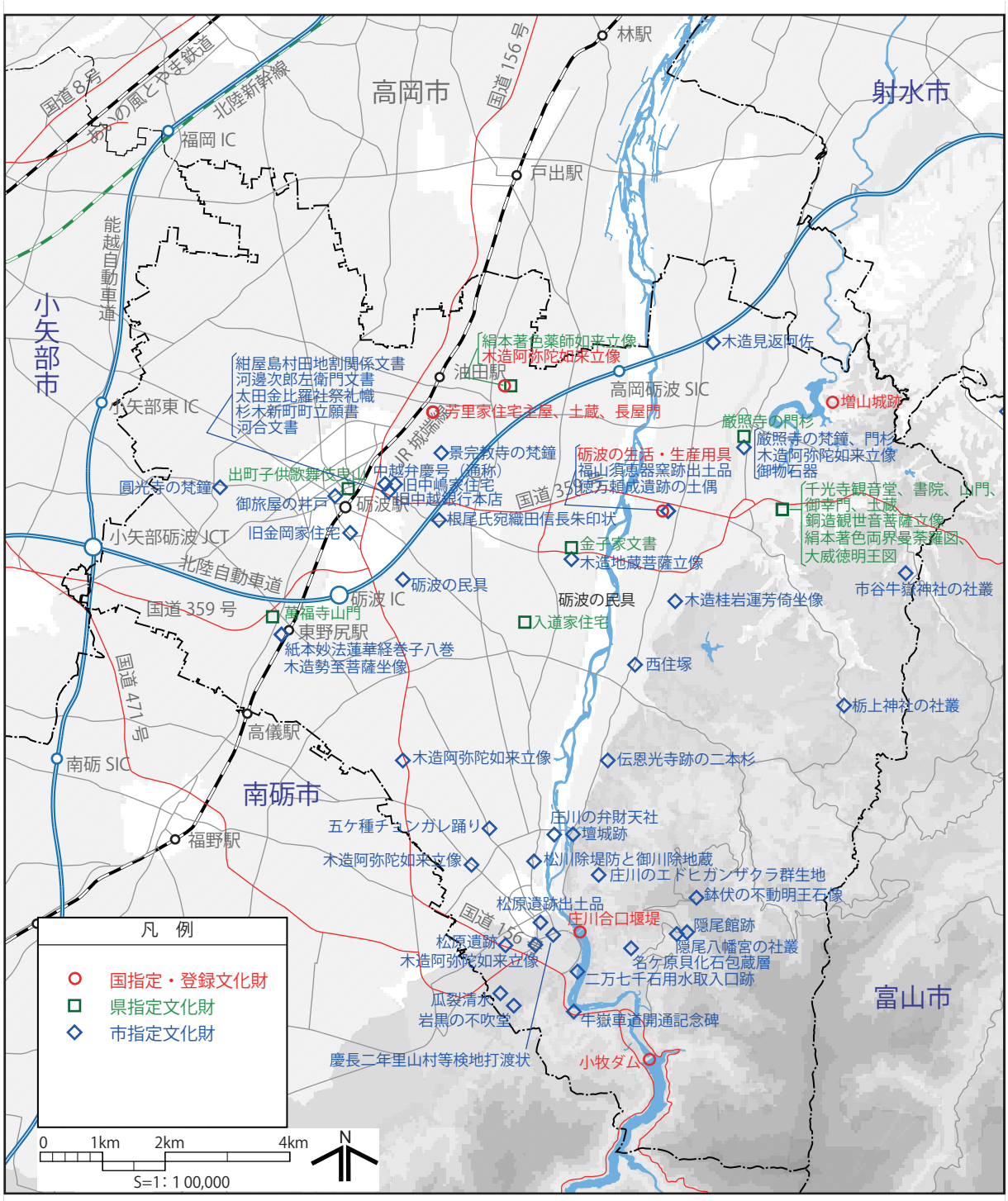
※「－」は制度がないものを示します。

令和 6 年（2024）3 月 31 日現在

（2）指定等文化財の分布状況

般若野荘　指定等文化財の分布状況をみると、中心市街地である出町周辺、中世の般若野荘の荘域（般若・東般若・太田・梅檀野・梅檀山）、旧庄川町域に集中していることが特徴的です。

散村景観　また、かつて庄川の氾濫原であった五鹿屋地区周辺は、文化財が少ない代わりに市内でもとくに散村景観が色濃く残っています。



(3) 指定等文化財の概要

建造物　国登録５件、県指定２件、市指定８件が有ます。建造物には、寺社建築・銀行建築・民家建築の３種類があります。寺社建築は梅檀野地区の千光寺に４件が集中していますが、もっとも古いものは瑞龍寺（高岡市）から移築された御幸門で、17 世紀前半頃の建築とみられます。同じく移築門としては、善徳寺（南砺市）に城ヶ端城の大手門と伝えられ譲り受けた萬福寺山門があります。また、太田地区の専念寺本堂は、当地の名工・藤井助之烝が手がけた建築です。

瑞龍寺　善徳寺　藤井助之烝

銀行建築としては、砺波地方の地主層の発起で設立された中越銀行の本店があります。助之烝が実施設計と工事監督を務め、明治 42 年に竣工した重厚で格調高い建物です。

砺波地方では明治時代になると「屋根をおろす」といって、茅葺きの主屋根と下屋根を取り払い、瓦葺きで一枚の大屋根をかけるようになります。大屋根の切妻建物は「アズマダチ」と呼ばれ、代表例として太田地区の入道家住宅があります。明治時代以前の姿を伝える茅葺の建物では、旧中嶋家住宅と旧金岡家住宅（かいにょ苑）があります。市内に残る数少ない茅葺き屋根住宅として貴重な存在です。　近代化遺産としては、庄川地域に小牧ダムと庄川合口堰堤（合口ダム）の２つのダムや、コンクリート橋である太田橋があり、それぞれ今も現役として機能しています。昭和初期のダム工事に関わった木村産業株式会社の事務所は先駆的な鉄筋コンクリート建物で、壁面や内装に左官職人・竹内源造による漆喰彫刻が施されています。

アズマダチ

絵　画　県指定が３件あります。常福寺の絹本著色薬師如来立像は鎌倉時代末期から室町時代の薬師来迎図ですが、明治初年に京都から招来したものです。千光寺には大威徳明王図と両界曼荼羅図があります。

彫　刻　国指定１件、県指定１件、市指定９件があります。常福寺の木造阿弥陀如来立像は、鎌倉時代の作品とみられ、運慶一派の快慶の作とされています。寺伝では増山城主神保安芸守の祈願所である久遠寺の本尊だったものが、落城の際に般若郷開発の中宮に逃れたといいます。もっとも古い仏像は、千光寺の銅造観世音菩薩立像です。これは白鳳時代の小金銅仏で、豊臣

写　真		
種　別	建造物	建造物
名　称	入道家住宅	萬福寺山門
指定年月日	平成 10 年（1998）2 月 25 日	昭和 40 年（1965）1 月 1 日
所有者	個人	萬福寺
所在地	太田地区	東野尻地区

秀吉が越中攻めの際に霊験を感じ、修復を命じたとの言い伝えがあります。彫刻は在地仏師の作による木造阿弥陀如来立像（正念寺）の木造仏のほか、鉢伏の不動明王石像のような石造物もあります。

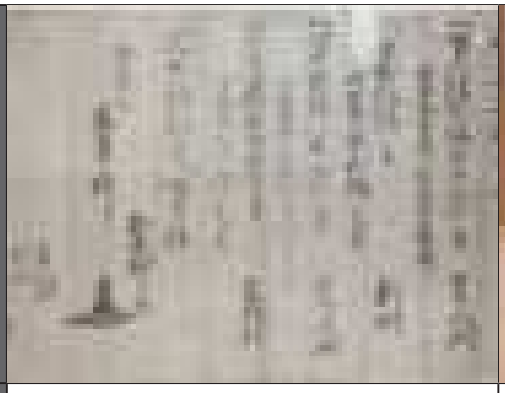
工芸品　市指定が３件あります。梵鐘が２点あり、厳照寺の梵鐘は江戸時代初期に旧砺波郡西保（現在の高岡市）の鋳物師によって鋳造されたもので、高岡鋳物のルーツともいえます。圓光寺の梵鐘は江戸時代中期に高岡鋳物師が鋳造したもので、第二次世界大戦中の供出を免れて保存されました。

高岡鋳物

書跡・典籍・古文書　県指定１件、市指定７件があります。古いものでは、越前国小山郷を治めた根尾右京亮に宛てた織田信長朱印状があります。右京亮の子・九郎左衛門宗胤は砺波郡庄下郷に移住し、千保川跡を拓きました。十村・肝煎を務めた家に伝わる金子家文書は、江戸時代に施行された改作法以前の村の構造を具体的に知ることができる資料です。また、本市の中心市街地である出町の起源を端的に示す史料として杉木新町町立願書があります。これは砺波郡杉木村二郎兵衛を筆頭に 16 名が署名し、中田町の奉行に提出したものです。ほかには江

出町の起源

写　真		
種　別	重要文化財（彫刻）	重要有形民俗文化財
名　称	木造阿弥陀如来立像	砺波の生活・生産用具
指定年月日	昭和 29 年（1954）8 月 29 日	平成 29 年（2017）3 月 3 日
所有者	常福寺	砺波市
所在地	南般若地区	般若地区ほか

写　真		
種　別	古文書	考古資料
名　称	慶長二年里山村等検地打渡状	徳万頼成遺跡の土偶
指定年月日	昭和 62 年（1987）3 月 30 日	平成 30 年（2018）6 月 29 日
所有者	個人	砺波市
所在地	東山見地区	般若地区

戸時代に砺波平野の開発を伝える文書として、河合文書や河邊次郎左衛門文書があります。氾濫原に散在する開拓の適地を選んで、そのに住居を定めて周辺を開いて行った様子を読み取ることができます。

考古資料　市指定が４件あります。このうち縄文時代に属するものが３点あり、中尾遺跡から出土した御物石器、縄文中期の拠点集落の発掘でみつかった松原遺跡出土品、三角形の顔と円錐形の体でできた徳万頼成遺跡の土偶があります。また、奈良時代の福山須恵器窯跡出土品があります。

土偶

歴史資料　市指定が１件あります。中越弁慶号は、明治 30 年から大正 13 年まで中越鉄道で活躍したイギリス製の機関車です。中越鉄道開業当時の車両で、砺波地方の近代化と産業の発展に貢献した貴重な近代化遺産です。

有形の民俗文化財　国指定１件、市指定３件があります。砺波の生活・生産用具は明治時代から昭和 30 年代までの砺波地方で営まれた、衣食住などの暮らしや用具、農具、職人の道具などの生業に関する用具類を網羅的・体系的に収集・整理したコレクションです。その量と質は、有形民俗文化財の中でも国内屈指の規模を誇ります。ほかに水難防護のため江戸時代末期に祀られた太田金比羅社の祭礼幟、風を鎮めるための風神堂である岩黒の不吹堂（ふかんどう）があります。

無形の民俗文化財　県指定１件、市指定１件があります。出町子供歌舞伎曳山は、出町神明宮の春季祭礼に本町通りを中心に山車が曳き回され、舞台の上で子供歌舞伎が上演されるお祭りです。江戸時代後期から続く曳山は東・中町・西町の３基があり、現在は３年に一度の当番町が子供歌舞伎をとりおこなっています。曳山で子供歌舞伎が演じられる祭りは全国的にみても珍しく、滋賀県の長浜・米原、石川県の小松、岐阜県の垂井など全国数カ所に限られます。

子供歌舞伎

五ヶ種チョンガレは、念仏聖の願人坊主が鉦をたたき諸国を歩いた音曲に由来する踊りで、種田地区の盆踊りに歌われてきました。砺波地方にある他のチョンガレ踊りと異なり、歌詞に特産の種籾が歌い込まれている点が特徴です。

チョンガレ

名　勝　瓜裂清水は、井波瑞泉寺を開いた綽如上人が岩黒の地で休憩の折に馬の蹄が突然陥

綽如上人

写　真		
種　別	無形民俗文化財	名勝
名　称	出町子供歌舞伎曳山	瓜裂清水
指定年月日	平成 6 年（1994）2 月 24 日	昭和 62 年（1987）3 月 30 日
所有者	砺波子供歌舞伎曳山振興会	砺波市
所在地	出町地区	東山見地区

写　真		
種　別	史跡	天然記念物
名　称	増山城跡	厳照寺の門杉
指定年月日	平成 21 年（2009）7 月 23 日	昭和 40 年（1965）10 月 1 日
所有者	砺波市ほか	厳照寺
所在地	栴檀野地区	栴檀野地区

没し、そのあとから清水が湧き出したと伝えられます。里人がこの霊水に瓜を冷やしたところ、瓜が自然に裂け、その冷たさとおいしさは格別であったことから綽如上人が瓜裂清水（うりわりしょうず）と命名したと伝わります。

史　跡　先史時代の史跡としては松原遺跡があり、縄文時代中期から後期にかけての集落として知られます。戦国時代の城跡としては、越中三大山城に数えられる増山城跡があります。

庄川の治水に関連する史跡としては、加賀藩が江戸時代に新しい川筋に一本化する工事で作った松川除堤防や、用水の取入口である二万七千石用水取入口跡があります。天正地震で流されなかったことで、藩主前田利長が水の神である弁財天を祀るよう指示したと伝わる庄川の弁財天社があります。出町にはかつて藩主が休息するための「御旅屋（おたや）」がありましたが、その御膳水用として掘られた御旅屋の井戸が今も市街地に保存されています。

御　旅　屋

天然記念物　杉の巨樹として、厳照寺の門杉、綽如杉、伝恩光寺跡の二本杉の３件があります。厳照寺の門杉はあたかも寺門のような形で生えている杉で、タテヤマスギ系の地方種マスヤマスギです。綽如杉も同じ樹種で、綽如上人お手植えの杉と伝えられます。また、栃上神社、市谷牛嶽神社、隠尾八幡宮の社叢がそれぞれ文化財に指定されています。ほかには庄川地域の向山にあるエドヒガンザクラ群生地や、貝類化石を豊富に産出する名ヶ原貝化石包蔵層があります。

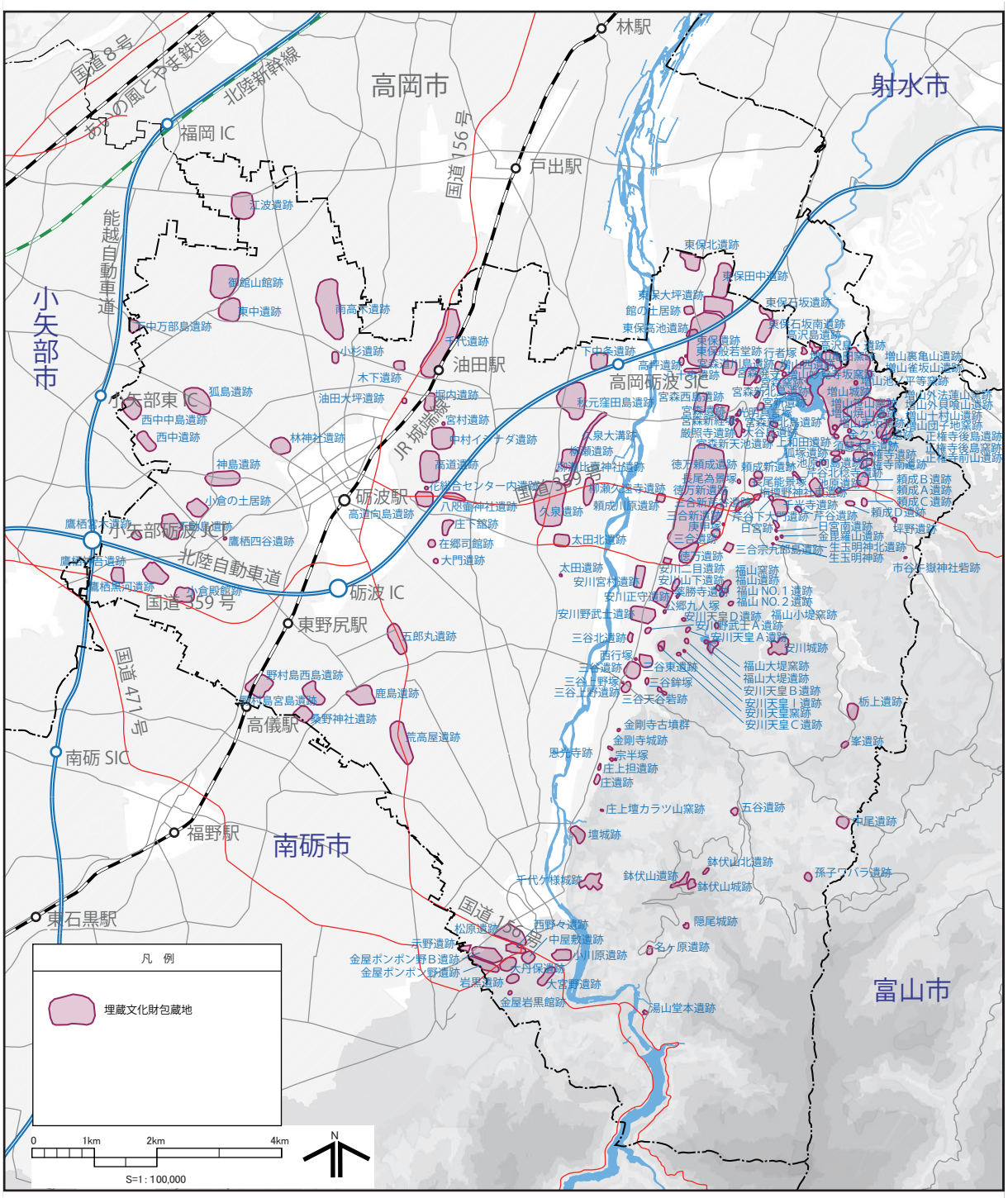
マスヤマスギ

（4）埋蔵文化財（遺跡・遺物）

これまで旧庄川町域と旧砺波市域でそれぞれ遺跡詳細分布調査を行っています。旧庄川町域では平成 14 年（2002）から２ヵ年をかけて遺跡詳細分布調査を行いました。旧砺波市域では平成 16 年（2004）から７ヵ年をかけて遺跡詳細分布調査を行い、旧庄川町域分と合わせて平成 23 年（2011）３月に『砺波市遺跡地図（砺波市遺跡詳細分布調査報告７《遺跡地図編》）』として公開しました。これら調査の結果、多くの新たな遺跡を確認するとともに、既存の遺跡の範囲や内容を見直しも行いました。

分布調査

遺跡地図



2　未指定文化財

本市では、平成 21 年度に「砺波市ふるさと文化財」を創設する際に、市内全地区の公民館の協力をえて、地域にある未指定文化財に関する情報を収集しました。また、令和４年度に本計画の策定に際して市民アンケートを行い、そのなかで「未指定文化財だが地域で大切にされているもの」を自由記述で挙げてもらい、未指定文化財の掘り起こしに努めました。そのほか、市史・町史をはじめ郷土史等を参考に、未指定文化財をまとめました。

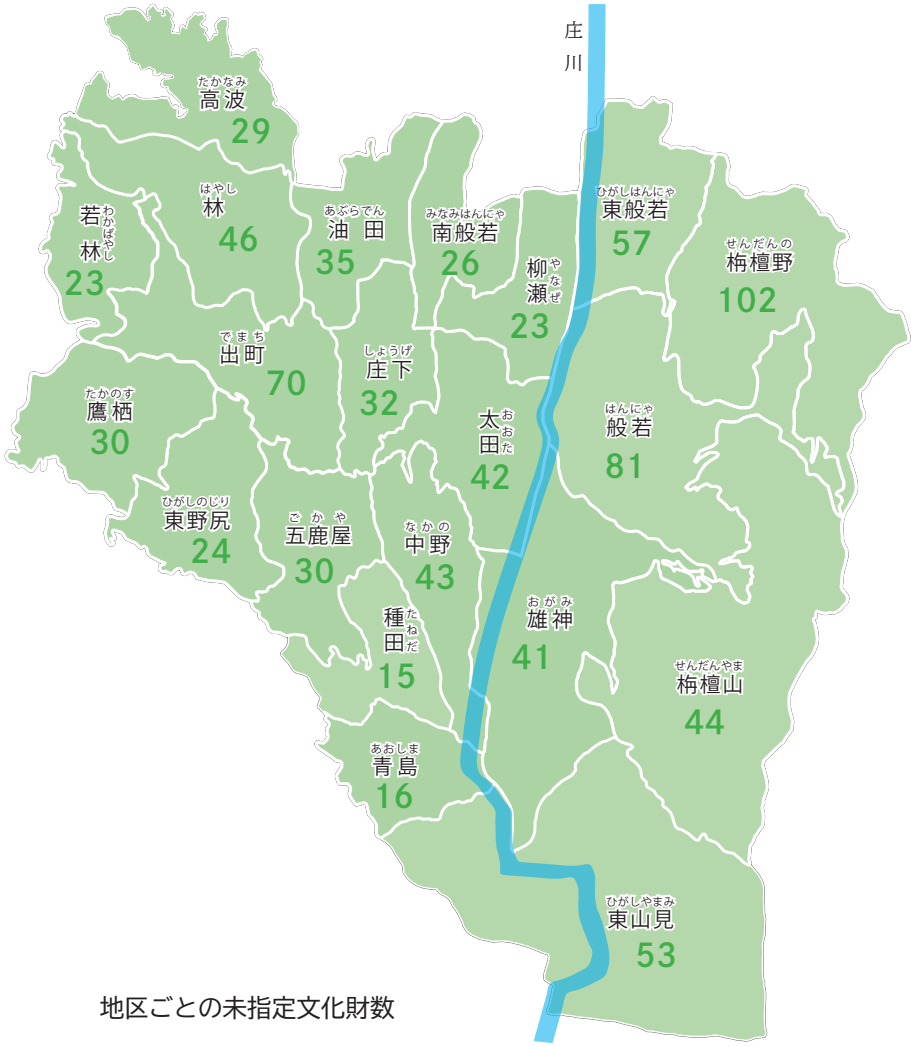
本市の未指定文化財の件数は、本計画作成時点で把握しているものについて、総数 911 件となっています。文化財の類型でみると、建造物 13 件、彫刻 206 件、工芸品 2 件、書跡等 1 件、考古資料 47 件、無形の民俗文化財 157 件、史跡 262 件、文化的景観 1 件、その他 25 件となります。このほか、埋蔵文化財包蔵地 197 件があります。道端に設置されている石造物や、各地区に伝わる獅子舞などの無形民俗文化財が多いのが特徴です。絵画、無形文化財、伝統的建造物群はありません。

文化的景観

獅　子　舞

地区別にみると中心市街地である出町と、般若野荘のあった般若・東般若・栴檀野に多く分布していることがわかります。

これらの未指定文化財には、調査が十分ではないため把握しきれなかったものも存在すると考えられます。今後も文化財保護審議会をはじめ市民と一体となって調査研究を進め、未指定文化財の存在を確認し、その価値を共有していきます。



地区ごとの未指定文化財数

■ 未指定文化財リスト

類型			出町	庄下	中野	五鹿屋	東野尻	鷹栖	若林	林	高波	油田	南般若	柳瀬	太田	般若	東般若	梅檀野	梅檀山	東山見	青島	雄神	種田	市内	庄川地域	合計
有形文化財	建造物		4		1	2									1				1					4		13
	美術工芸品	彫刻	11	8	20	9	7	12	7	13	9	4	8	8	16	16	17	16	14	1	4	6		0		206
		工芸品									1													1		2
		書跡等																						1		1
		考古資料		1						3		3	2		8	6	1	12	4	7				0		47
民俗文化財	無形の民俗文化財	無形の民俗文化財	21	8	5	6	6	4	4	11	3	9	6	2	2	4	5	4	3	8	7	5	8	7	2	140
		食	1	1	1															1				10	3	17
記念物	遺跡	遺跡	3						2	1				1		1	2	2		1		2		4		19
		寺院	14	2	7	5	6	5	1	4	5	4	5	2	5	8	4	6	1	5	1	5	3			98
		神社	13	3	8	4	2	3	5	10	8	8	4	4	6	10	5	12	15	13	3	5	4			145
文化的景観																								1		1
その他	人文									1										2				3		6
	自然		2	1	1	1									1									3	10	19
合計（未指定文化財）			69	24	43	27	21	24	19	43	26	28	25	17	39	45	34	52	38	38	15	23	15	34	15	714
記念物	遺跡	散布地	1	5		3	3	4	4	3	2	7	1	3	2	25	12	17	6	11	1	7				117
		集落跡		1												2	3	5		1						12
		貝塚																								0
		都城跡		2				1			1					1	1	2		3		4				15
		官衙跡													1											1
		社寺跡												2			2	3				1				8
		古墳																				1				1
		横穴墓																								0
		その他の墓						1								1	1									3
		生産遺跡												1												1
		窯跡														5	1	11				1				18
		塚														1	3	3				1				8
		製鉄																9								9
		その他														1						3				4
合計（埋蔵文化財包蔵地）			1	8		3	3	6	4	3	3	7	1	6	3	36	23	50	6	15	1	18				197
合計（未指定文化財）			70	32	43	30	24	30	23	46	29	35	26	23	42	81	57	102	44	53	16	41	15	34	15	911

(1) 未指定文化財の概要

建造物　チューリップに関するものとして四季彩館やチューリップ公園のチューリップタワーがあります。民家建築として砺波平野でアズマダチと並んで有名なマエナガレがあります。アズマダチの意匠を模した建物として、若鶴大正蔵があります。ほかには寺社建築として太田地区の万福寺観音堂、学校建築として東別所公民館（旧東別所分校跡）があります。


チューリップタワー

彫　刻　彫刻では、寺院が所蔵する仏像をはじめ、珍しいところでは紺屋島神社の木造雨宝童子像があります。また、砺波平野では幕末から明治にかけて石仏が多く造立されたことから、今でも道端に多くみられます。神社には参道に狛犬がありますが、砺波平野では拝殿や本殿に安置される木造や石造などの神殿狛犬があり、太田地区の住吉神社や栴檀山地区の伏木谷宇志多気社に代表的なものがあります。

石造仏では、中筋往来の石仏群や東中の六地蔵、東別所上村の不動明王石仏、井栗谷峠の不動明王石仏などがあります。砺波地方は聖徳太子信仰が盛んだったこともあり、狐島の太子像や庄下地区の聖徳太子孝養像などがあります。　また、庄川地域には、富山県三大大仏の一つでコンクリート製の庄川大仏（金屋大仏）があり、昭和初期にダム建設で好況だった頃の象徴的な存在として知られています。

庄川大仏

考古資料　縄文時代草創期のものとして唯一の例として知られる、福山大堤遺跡出土の石槍があるほか、中期以降のものとして松原遺跡や孫子ワバラ遺跡の石器や土器があります。このほか、奈良・平安時代の集落跡からの出土品や増山城跡の出土品などがあります。

歴史資料　中越鉄道の創始者である大矢四郎兵衛銅像があります。また、南般若地区に伝わる舞句は、俳諧の連歌から分離した前句付けが江戸を中心に盛んに行われ、加賀藩下に波及した郷土文芸で、各地の神社に舞句の額が奉納されています。庄川右岸では江戸時代から緑色凝灰岩である金屋石が採掘され、金沢の辰巳用水や黒部の十二貫野用水で使用されました。


厄払い鯉の放流の様子

無形の民俗文化財　稲作に伴う虫送りの行事としてヨータカが行われ、庄下地区や林地区では子供達がトッペ行燈を持ちながら各戸を巡回しています。年中行事としては、小正月に左義長が行われ、孟宗竹を中心に高く組み上げ、そこへ各

家庭から持ち寄ったしめ飾りや書き初めなどを焼きます。

また、市内では獅子舞が盛んに行われており、集落ごとに獅子舞が続けられています。また、田植えが終わったあとの田祭り（ヤスンゴト）として夜高行燈や田楽行燈が行われています。また、民謡としてとなみ音頭、鷹栖音頭、となみ小唄、となみ荷方節、となみ散居節、えんじゃら節があります。ほかに、鯉に御神酒を飲ませて庄川に放す神事「厄払い鯉の放流」や、三十三年に一度行われる庄川弁財天社御開扉大祭（あがりもん）などがあります。


砺波平野の散居村（散村）の夕景

文化的景観　砺波平野では広大な水田に、屋敷林を伴う住居が点在する独特の集落がみられ、散居村（散村）と呼ばれています。同様の集落形態は全国各地にありますが、そのなかでも保存状態が良く、文化的景観の代表例として知られています。

天然記念物　庄川の代表的な魚でもある鮎（アユ）をはじめ、魚類であるヤマメ、イワナ、サケ、サクラマス、コイ、フナ、アユカケなどがあります。また、花ではチューリップ、樹木では出町の大ケヤキ、杉木の日枝神社の大樹、個人宅のウラジロガシ、五鹿屋のイロハカエデなどがあります。

史　跡　奈良時代に須恵器を焼くためにつくられた福山窯跡が般若地区の丘陵地にあります。真言宗・集福寺の跡とみられる宮森廃寺からは、15 世紀前後の密教法具が発見されています。

般若野荘の荘域には、荘園領主・徳大寺実通の墓とされる親王塚や、その従者の墓とされる公卿塚（九人塚）があり、荘園をめぐる混乱の歴史を物語ります。

徳大寺実通

戦国時代の城跡としては、安川城跡、壇城跡、隠尾城跡、千代ケ様城跡といった山城があります。雄神地区には、増山城最後の城主・中川宗半にまつわる宗半塚があります。平地の居館としては、館の土居跡があり、今も土塁の一部が残されています。

出町の前身である杉木新町の開祖・杉木村二郎兵衛の墓や、出町真如院の境内にある蓑毛塚、狐島の太子堂、柳瀬の筆塚などがあります。戦国時代に関するものとしては、上杉謙信の祖父にあたる長尾能景塚、増山城下町にある長念寺塚があります。太平洋戦争に関するものとして、般若村分会射撃場跡や地下工場用トンネル跡があります。


杉木村二郎兵衛の墓

食　郷土食である「よごし」をはじめ、ゆべす、いとこ煮、里いもの田楽、干しずいきの白和えなどがあります。文化庁の 100 年フードにも選ばれている、特産の大門素麺もあります。庄川地域では、ゆず、ゆず味噌、ゆずの醤油和え、金屋ねぎがあります。

寺院・神社　市内には地区ごとに寺院や神社がありますが、寺院では中心市街地である出町地区に集中しています。また、神社では、山間地である梅檀野地区や梅檀山地区、庄川地域の



郷土料理のよごし



大門素麺の天日干しの風景

東山見地区に比較的多く存在しています。

伝承地　梅檀野地区には、戦国時代に当地での合戦で討死したとの伝承がある伝長尾為景塚があります。東般若地区には東京・浅草寺にまつわる浅草観音発祥伝承地があります。浅草寺本尊である聖観音像の発祥としての伝承があり、昭和初年から観音祭りが行われています。

浅　草　寺



浅草観音発祥伝承地

埋蔵文化財包蔵地　古い時代では旧石器時代の芹谷遺跡などがありますが、弥生時代や古墳時代はごくわずかであり、奈良時代から江戸時代までの遺跡があります。

その他　庄川地域には江戸時代から飛騨や五箇山で伐り出された木材が流送によって集積していたことから、明治時代に入るとロクロ技術で椀や盆をつくる庄川挽物木地が生まれ、伝統的工芸として受け継がれています。

庄川挽物木地

第３章　砺波市の歴史文化の特性

１　砺波市の歴史文化の特性

本市の歴史文化は、庄川流域に広がる扇状地や河岸段丘である芹谷野段丘、射水丘陵から連なる庄東山地など、自然的・地理的環境との深い関わりによって形成されてきました。旧石器時代から人々の営みが始まり、縄文時代には扇状地の扇頂部や丘陵帯を中心に集落が展開し、奈良時代には土地の開墾が盛んに行われ、現代に続く穀倉地帯の基礎ができました。中世には中央の公家などによって般若野荘や油田条といった荘園が経営され、江戸時代には治水工事によって氾濫原を中心に開拓が進み、散村集落が広がりをみせました。

芹谷野段丘
庄東山地
般若野荘
油田条

こうした環境のもと、旧石器時代から現代に至るまで約２万年の歴史の中で、多様な歴史や文化が育まれ、多種多様な文化財が受け継がれてきました。

その歴史や文化の特性は、以下の４つにまとめることができます。

（1）戦の歴史文化

戦の歴史文化

本市は、古代から数々の戦乱の舞台となりました。古くは平安時代の源平争乱時、倶利伽羅峠の合戦の前哨戦として般若野の合戦が行われ、続く鎌倉時代には承久の乱で戦いが繰り広げられました。戦国時代には北陸屈指の巨城である増山城が築かれ、各地に城・砦・館といった防御施設がつくられました。

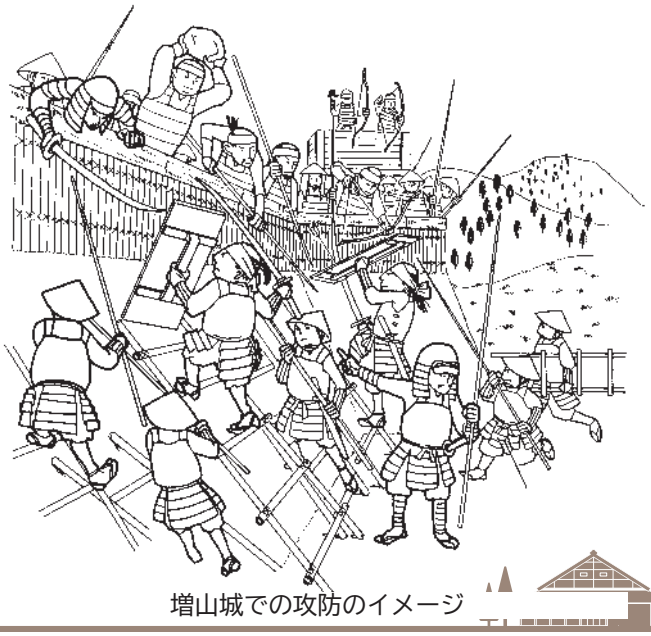


午飯岡碑

● **般若野の合戦**（治承・寿永の乱）　古くは平安時代末期、治承・寿永の源平争乱のとき、倶利伽羅峠の合戦の前哨戦として般若野の合戦が行われ、平家軍と源氏が芹谷野段丘の麓で激突しました。木曽義仲率いる源氏が勝利を納め、その勢いにのって倶利伽羅峠に攻め込み、京への上洛を果たしました。市域で行われた初めての合戦は、源平争乱の結果に大きな影響を及ぼしました。市内の各所には、義仲軍の足跡を示す石碑や伝承が残されています。



木曽義仲像（小矢部市・埴生護国八幡宮）



増山城での攻防のイメージ

● **般若野荘の合戦（承久の乱）**　続く鎌倉時代には、後鳥羽上皇が討幕の兵をあげた承久の乱で、幕府軍と京方軍（後鳥羽上皇方）が般若野荘で合戦を繰り広げました。戦の結果、京方軍は敗れ、勝利した幕府軍は入京を果たしています。

● **増山城をめぐる攻防**　戦国時代には越中三大山城に称される増山城が築かれました。城は長らく越中守護代の神保氏が治めていましたが、越中に進攻する越後上杉氏にたびたび攻略されています。その後、織田信長勢によって制圧され、越中を平定した佐々成政の支城として機能しますが、豊臣秀吉の大軍による越中討伐で前田氏の支配下となります。越中討伐では富山に向かう秀吉軍が梅檀野地区を通過しています。また、戦国時代には在地土豪・寺院・一向一揆などによって城・砦・館といった防御施設がつくられました。

越後上杉氏

越中討伐

本市はたび重なる合戦の場となり、さらに増山城を中心に戦乱の舞台となり各所に防御施設が残されています。増山城などさまざまな場面で活用されているのが本市の歴史文化の特性の一つです。

(2) 信仰の歴史文化

信仰の歴史文化

古くから人々は信仰をよりどころとし、白鳳時代には三論宗の千光寺が開かれ、奈良時代には福山窯で須恵器の瓦塔が焼かれました。鎌倉時代に新しい仏教が広まると、浄土真宗の勢力が一気に広がり「真宗王国」といわれる越中の風土が形作られました。また、子供歌舞伎や獅子舞といった、信仰にもとづく祭りの文化も栄えました。



千光寺観音堂

● **千光寺の開基**　市内でもっとも古い信仰対象は千光寺です。白鳳時代に開かれ、はじめは三論宗でしたがのちに真言宗に変わり、江戸時代には加賀藩の祈祷所となりました。

加賀藩

続く奈良時代に操業の福山窯からは、須恵器製の層塔のミニチュアである瓦塔が出土しており、このことからも仏教の浸透をうかがい知ることができます。

瓦塔

● **浄土真宗の広がり**　のちに真言宗や浄土系の信仰も広まりますが、鎌倉時代に新しい仏教が始まると、浄土真宗の勢力が一気に広がり「真宗王国」といわれる越中の風土が形作られま



安川野武士の太子堂



庄の獅子舞

した。砺波地方では井波別院瑞泉寺と城端別院善徳寺を中心に教化を広めました。市内でも多くの浄土真宗寺院が存在しています。また、聖徳太子を崇拝する太子信仰も盛んで、幕末頃から太子二歳石仏の造立が急速に行われました。

太子信仰

● **信仰に由来する祭礼**　また、信仰にもとづく祭りの文化も栄えました。この地方では獅子舞や盤持、草相撲、チョンガレなどがあります。出町では子供歌舞伎も盛んに上演され、今も東・中町・西町の三町が当番制で祭りを催行しています。

（3）水の歴史文化

水の歴史文化

本市は大部分が庄川でつくられた扇状地です。庄川が運ぶ水は平野の水田を潤し、奈良時代から米作りに利用されてきました。古くから砺波は穀倉地帯として知られ、水田の多さは独特の景観が生み出しています。

庄川は飛騨からの流木や、多くの恵みをもたらす反面、水害も多く、堤防を築くなどして治水にも労力を要しました。



庄川での流送の様子

● **庄川の治水**　庄川は、江戸時代に現在の河道に固定されるまで野尻川、中村川、新又川、千保川と移り変わっていますが、支流が網の目のような川筋となって砺波平野に流れていました。それらの川は氾濫を繰り返し、人々は常に洪水の脅威と闘いながら耕作地を守ってきました。

天正地震によって現在の河道に流れが変わった後、江戸時代に加賀藩が45年の歳月をかけて弁財天前に松川除とよばれる堤防を築き、川筋は一本化され洪水の危険性は少なくなりました。

● **庄川からの用水**　奈良時代に平野の各地に荘園が作られましたが、用水の発達と密接な関係があると考えられます。扇央部の久泉遺跡では奈良時代の集落とともに幅10m以上の大溝跡



千保柳瀬口用水取入口



庄川合口ダム（庄川合口堰堤）

が見つかり、古くから用水を掘削していたことがわかりました。

その後、平野には用水網が血管のように扇状地に張り巡らされますが、洪水のたびに取水口の修復を余儀なくされることや、取入れ堰の維持管理の困難さから、昭和初期に取水口を一括管理するため用水の合口化工事を行い、ダムが完成しました。

合口化工事

● **庄川の流送治水**　上流の五ヶ山や飛騨からの流木や、多くの恵みをもらたしました。反面､洪水など水害も多く、堤防を築くなどして治水にも苦心しました。くから砺波は穀倉地帯として知られ、水田の多さは独特の景観が生み出しています

(4) 米の歴史文化

奈良時代に未開地を開墾した利波臣志留志は、多くの米を生産し、奈良東大寺大仏建立に貢献するなどして米どころの基礎を作りました。近世には加賀藩が堤防を築いたことで庄川が固定化され、そのおかげで氾濫原を開墾して散村集落がつくられました。こうした藩の政策により米の収穫量が増加し、加賀百万石の大部分は砺波郡によって支えられました。

加賀藩

● **米どころのはじまり**　奈良時代に未開地を開墾した利波臣志留志は、奈良東大寺大仏建立に際して米を寄進し、その量は全国の豪族でもっとも多かったといわれています。志留志は米どころの基礎を作った人物ともいえます。その後、志留志の開墾した土地は東大寺の荘園となり、中世には般若野荘として続きました。

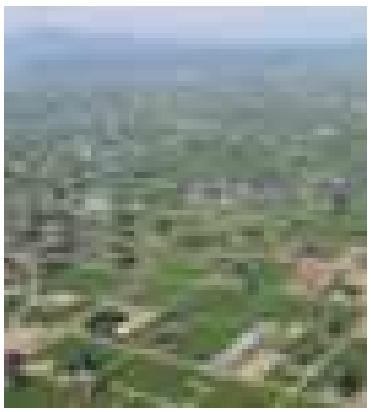
東大寺荘園

● **散村の展開**　近世には加賀藩が堤防を築いたことで庄川が固定化され、そのおかげで氾濫原の開拓が進みました。新開した村は、米作りに特化した孤立荘宅の形態をとり、それらが集合して散村集落ができていきました。改作法など藩の政策により米の収穫量が増加し、加賀百万石の 25%は砺波郡によって支えられるまでになりました。

散村集落

● **チューリップの生産増加**　大正時代から米作りの裏作として、チューリップの栽培が始まりました。チューリップの球根栽培はやがて砺波に定着し、栽培者や生産量が順調に増えましたが太平洋戦争でほぼ途絶えてしまいました。戦後に復興しましたが、GHQ が砺波にある園芸試験場を廃止しよう動きがあった時、存続をかけてチューリップフェアが行われました。その後、継承されたフェアは今日では富山県を代表する春のイベントになっています。





現在の散村風景



久泉遺跡で見つかった大溝跡